

酒々井町墨古沢南 I 遺跡(2)

— 主要地方道富里酒々井線(印旛郡酒々井町墨)道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成30年3月

千葉県教育委員会

し　す　い　まち　すみ　ふる　さわ　みなみ　いち　い　せき

酒々井町墨古沢南 I 遺跡 (2)

— 主要地方道富里酒々井線（印旛郡酒々井町墨）道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成 25 年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 23 集として、千葉県印旛土木事務所の主要地方道富里酒々井線（酒々井町墨）道路改良事業に伴って実施した印旛郡酒々井町墨古沢南 I 遺跡（2）の発掘調査報告書です。調査成果としては、縄文時代の竪穴住居跡と土坑、陥穴を検出しました。このうち 1 軒の竪穴住居跡は、周辺の遺跡でも検出例が少ない張出部のある柄鏡形住居跡であり、過去の調査事例と合わせ、縄文時代中期から後期の集落の様相を知る上で貴重な成果を得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成 30 年 3 月

千葉県教育委員会

文化財課長 萩原恭一

凡　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部印旛土木事務所による主要地方道富里酒々井線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。
墨古沢南 I 遺跡（2）印旛郡酒々井町墨 1380-1（遺跡コード 322-007）
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の依頼を受け、平成 28 年度と平成 29 年度に千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は以下のとおりである。

平成 28 年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 永沼律朗

発掘調査班長 田井知二

担当者 上席文化財主事 土屋潤一郎

実施期間 平成 28 年 12 月 1 日～平成 29 年 1 月 31 日

平成 29 年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 萩原恭一

発掘調査班長 山田貴久

担当者 文化財主事 小澤政彦

- 5 本書の執筆・編集は小澤が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、酒々井町教育委員会、千葉県県土整備部道路整備課、同印旛土木事務所、公益財団法人千葉県教育振興財團ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方針はすべて座標北である。
- 8 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
第 1 図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「酒々井」平成 22 年を縮小編集
第 2 図 酒々井町役場発行 1/2,500 都市計画図 平成 24 年測量を縮小編集
- 9 図版 1 の航空写真は、京葉測量株式会社による平成 12 年撮影のものを使用した。
- 10 遺物分布図では土器・土製品（●）、石器・石製品（△）としている。
- 11 墓古沢南 I 遺跡は、過去に財団法人千葉県文化財センター（当時）が調査を行っており、今回の調査は 2 次調査となる。混同を避けるため本書では（2）を付けていたが、発掘調査から整理作業における図面類については 2 次調査を示す番号を付していない。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 事業の経緯と経過.....	1
2 調査の方法と経過.....	1
第2節 遺跡の位置と環境.....	2
第2章 調査の成果.....	7
第1節 概 観.....	7
第2節 検出された遺構と遺物.....	7
1 竪穴住居跡.....	7
2 土 坑.....	16
3 陷 穴.....	22
4 遺構外出土遺物.....	22
5 溝状遺構.....	25
第3章 総 括.....	26
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 遺跡位置及び周辺の遺跡.....	3	第8図 SI-002 出土遺物（2）、SK-010 出土遺物	14
第2図 調査対象範囲と墨古沢南I 遺跡遺構分布	5	第9図 SI-002 出土遺物（3）	15
第3図 遺構配置図.....	6	第10図 SK-001～SK-008、SK-009	17
第4図 SI-001・出土遺物（1）.....	8	第11図 SK-001～SK-007 出土遺物	19
第5図 SI-001 出土遺物（2）.....	9	第12図 SK-007・SK-009 出土遺物	21
第6図 SI-001 出土遺物（3）.....	10	第13図 遺構外出土遺物	23
第7図 SI-002・出土遺物（1）、SK-010	13		

表 目 次

第1表 周辺の縄文時代遺跡一覧表.....	2	第2表 出土石器属性表.....	24
-----------------------	---	------------------	----

図版目次

図版1 航空写真（S=1/10,000）	図版5 出土遺物（1）
図版2 SI-001、SI-002	図版6 出土遺物（2）
図版3 SI-002、SK-001	図版7 出土遺物（3）
図版4 SK-002～SK-009	図版8 出土遺物（4）

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 事業の経緯と経過

主要地方道富里酒々井線は、印旛郡酒々井町と富里市を結ぶ道路であり、交通量が非常に多い一方で、歩道未整備区間が多く残っている。印旛郡酒々井町墨地区では、周辺教育施設の通学路にも指定されており、地域住民の生活道路としても多く利用されている。こうした地域住民の安全を図るため、印旛土木事務所により歩道の整備計画が立てられた。この事業計画の実施に当たり、平成13年2月に千葉県印旛土木事務所長より事業地内における「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査の結果を踏まえ、同年4月に事業計画地内は埋蔵文化財の包蔵地である旨の回答を行った。この回答を受け、その取扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、千葉県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

なお、調査対象地の北側では、財團法人千葉県文化財センター（当時）による東関東自動車道酒々井パーキングエリア拡張工事に伴う発掘調査が行われ、旧石器時代の遺物集中地点がまとめて検出された。それらは大規模な環状ブロック群の西側部分を構成するもので、未調査地域に環状ブロック群の範囲や内容を把握し、国指定史跡に向けた資料を得るために保存目的の確認調査を実施している。確認調査の結果、今回の調査対象地に隣接する地点では、石器の単独出土が1か所確認されただけであり、石器集中地点の広がりを認めることはできなかった。この確認調査の結果を受けて、千葉県教育委員会は、今回の調査対象地の下層についても記録保存の調査とすることとした。

発掘調査は調査面積860m²を対象に平成28年12月1日に開始し、平成29年1月31日に現場作業を終了、平成29年度に整理作業を実施した。

2 調査の方法と経過

発掘調査 墨古沢南I遺跡は、旧石器時代、縄文時代の集落跡である。発掘調査に当たっては、過去の調査で設定したグリッドを基準としてグリッド名を付した。グリッドは公共座標を基準として40m×40mの大グリッドを設定し、この大グリッド内を4m×4mの小グリッドに分割している。

上層の調査については、調査対象地の面積が狭小であったため、全面表土除去による確認調査を行うこととした。排土は調査対象地内で処理することにしたため、調査対象地を東西で2分割し、片方を排土置場にして交互に調査を行った。表土掘削は重機で行い、遺構精査は人力で行った。その結果、縄文時代の竪穴住居跡2軒、土坑9基、陥穴1基、近世以降と考えられる溝3条を検出した。下層の調査については、2m×2mのグリッドを11か所設定し、調査対象面積の4%を基準として確認調査を行った。下層の調査では、遺構、遺物は認められなかった。調査終了後、調査対象地を重機で埋め戻し、現場作業を終えた。

整理作業 発掘作業終了後、調査図面・写真的記録整理、遺物の整理作業を行った。その後、現場図面の鉛筆トレース・修正を行い、トレース原図を作成した。併行して遺物は、分類、接合後に掲載するもの

を選抜し、実測、拓本、写真撮影を行った。遺構及び遺物の挿図はペントレースで、写真図版はデジタルにより補正・編集を行い作成した。その後、原稿執筆・編集・校正作業を経て、報告書刊行となった。また、報告書編集中に報告書に基づいた収納整理作業も併せて実施した。

第2節 遺跡の位置と環境（第1～3図、図版1）

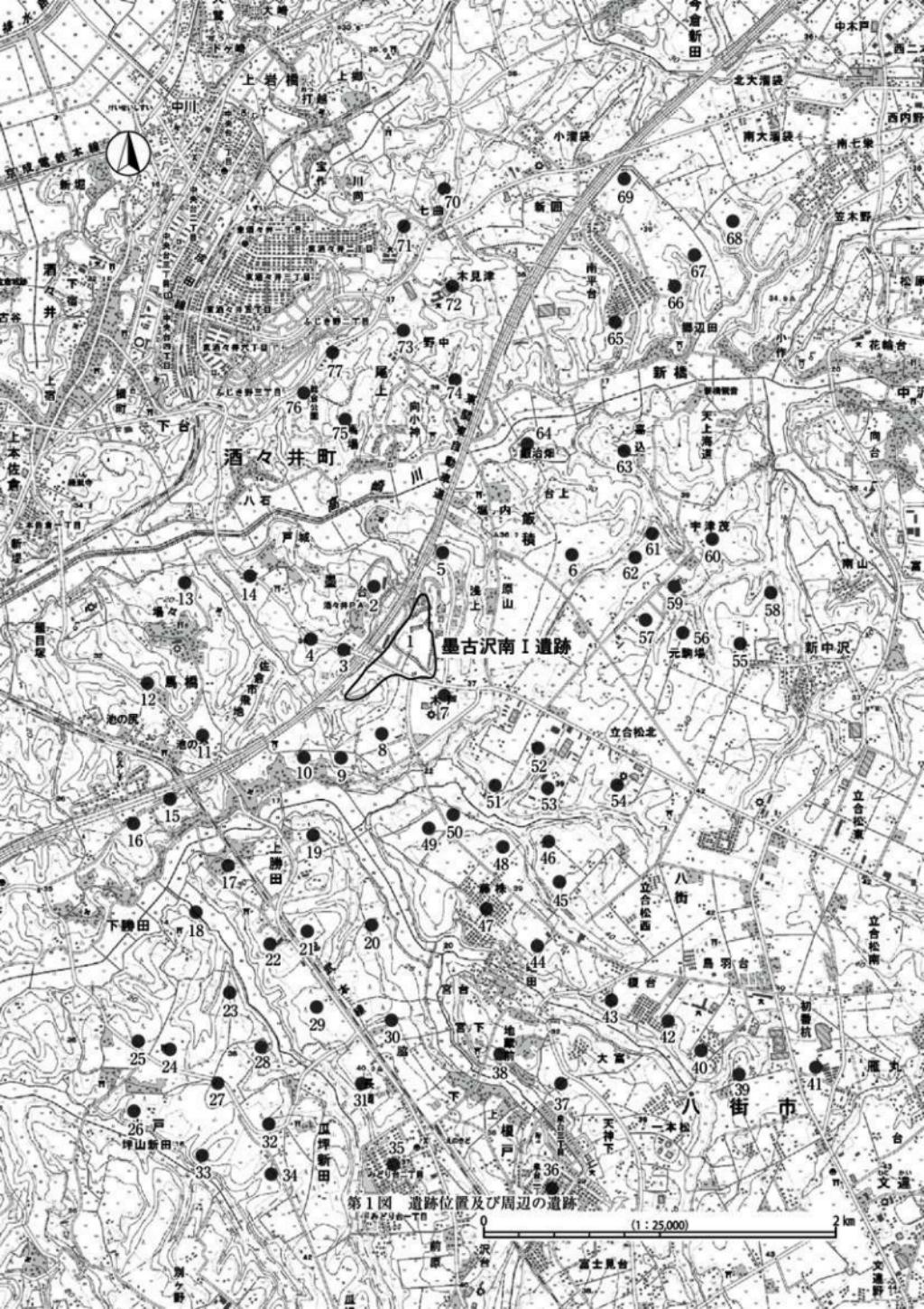
今回の調査対象となった墨古沢南I遺跡（2）は、印旛郡酒々井町墨1380-1に所在し、鹿島川の支流である高崎川に開析された標高約35mの台地上に立地する。本遺跡が立地する台地は、北側を高崎川、南側を南部川によって挟まれ、南北から支谷が入り込んでいる（図版1）。

周辺の地形は、高崎川によって、台地が樹枝状に刻まれる。高崎川は酒々井町の東側に隣接する富里市に源を発し、東から西へ流れ、印旛沼の手前で鹿島川と合流する。その高崎川に沿って、本遺跡が立地する台地は東から西へと緩やかに傾斜しながら延びている。

ここで報告する墨古沢南I遺跡（2）で出土した遺構・遺物の多くは縄文時代のものであるため、周辺遺跡の概観も縄文時代の遺跡に限って行う（第1図）こととした。なお、本遺跡周辺の縄文時代遺跡の一覧を第1表にまとめた。また、周辺遺跡の概観は、千葉県文化財センターによる報告（千葉県文化財セン

第1表 周辺の縄文時代遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	墨古沢南I遺跡	早期、前期、中期、後期、晚期	40	一之岡II遺跡	早期、前期
2	墨古沢遺跡	早期、前期、中期、後期、晚期	41	宇津木堀遺跡	中期
3	墨古沢南II遺跡	中期、後期	42	一之岡I遺跡	早期、前期、中期、後期
4	墨古沢遺跡	前期、中期、後期	43	鉄砲作遺跡	早期、中期、後期
5	墨古沢北遺跡	前期、後期、晚期	44	桜前遺跡	中期
6	瓶原原山遺跡	草創期、早期、前期、中期、後期、晚期	45	藤株I遺跡	中期
7	墨木I遺跡	草創期、早期、前期、中期、後期	46	藤株V遺跡	早期、中期
8	墨新山遺跡	草創期、早期、前期、中期、後期、晚期	47	藤株VI遺跡	早期、中期
9	上勝田大谷台遺跡	早期、前期	48	藤株II遺跡	前期、中期
10	上勝田鍾田遺跡	早期、中期	49	上勝田鏡向B地区遺跡	前期
11	馬橋出戸I遺跡	早期	50	上勝田鏡向遺跡	不明
12	馬橋坂台遺跡	不明	51	立会松北I遺跡	早期、前期
13	墨大広台遺跡	中期	52	立会松北II遺跡	中期
14	墨馬場遺跡	中期	53	立会松北III遺跡	早期
15	上勝田ノ坪遺跡	早期、中期	54	立会松北IV遺跡	早期
16	F上勝田ノ坪遺跡	早期、前期	55	元胸場Ⅳ遺跡	前期、中期
17	上勝田道谷津遺跡	中期	56	元胸場Ⅴ遺跡	中期
18	下勝田天神台遺跡	中期、後期	57	元胸場VI遺跡	不明
19	上勝田遠坪遺跡	中期	58	元胸場Ⅶ遺跡	早期、前期、中期
20	上勝田八反山遺跡	不明	59	元胸場Ⅷ遺跡	早期、後期
21	上勝田城内遺跡	早期	60	中沢高野台遺跡	前期、中期、後期、晚期
22	上勝田白畠山遺跡	中期	61	元胸場Ⅰ遺跡	中期
23	下勝田北ノ下東遺跡	中期	62	元胸場Ⅳ遺跡	後期
24	下勝田北ノ下西遺跡	中期	63	新横道遺跡	早期、前期、中期、後期、晚期
25	下勝田殿台東遺跡	中期、後期	64	飯積上台遺跡	早期、前期、中期、後期
26	木戸新田遺跡	中期	65	寺沢遺跡	早期、前期、中期、後期、晚期
27	木戸岡作遺跡	早期、前期、中期	66	外山遺跡	前期
28	下勝田池ノ台遺跡	中期、後期	67	中条遺跡	中期
29	上勝田前原遺跡	中期	68	南大瀬袋遺跡	草創期、早期、前期、中期
30	清水作遺跡	中期	69	新圃遺跡	前期、中期
31	長岡遺跡	不明	70	上岩橋下小山作遺跡	前期、中期
32	瓜坪新田廻戸遺跡	中期	71	上岩橋七曲遺跡	前期
33	木戸貝壳遺跡	早期、前期	72	尾上平台遺跡	前期
34	坪山新田貝殻前遺跡	中期	73	尾上出上遺跡	早期、前期、中期
35	置里遺跡	中期	74	尾上新田遺跡	後期
36	鷗山遺跡	早期、中期	75	尾上広畑遺跡	不明
37	新地遺跡	不明	76	墨總合公園内遺跡	早期、前期、中期、後期、晚期
38	向遺跡	早期、中期	77	尾上柳作遺跡	早期、前期、後期
39	一之岡Ⅲ遺跡	草創期、早期、前期			



ター 2005) に詳述されているので、併せて参照されたい。

草創期の遺跡は、周辺では確認されていないが、飯積原山遺跡(6)で多網文土器1点と有舌尖頭器が出土している。有舌尖頭器は他にも墨木戸遺跡(7)・墨新山遺跡(8)・一之綱Ⅲ遺跡(39)で出土しており、今後周辺で草創期の遺跡が確認される可能性は十分に考えられる。

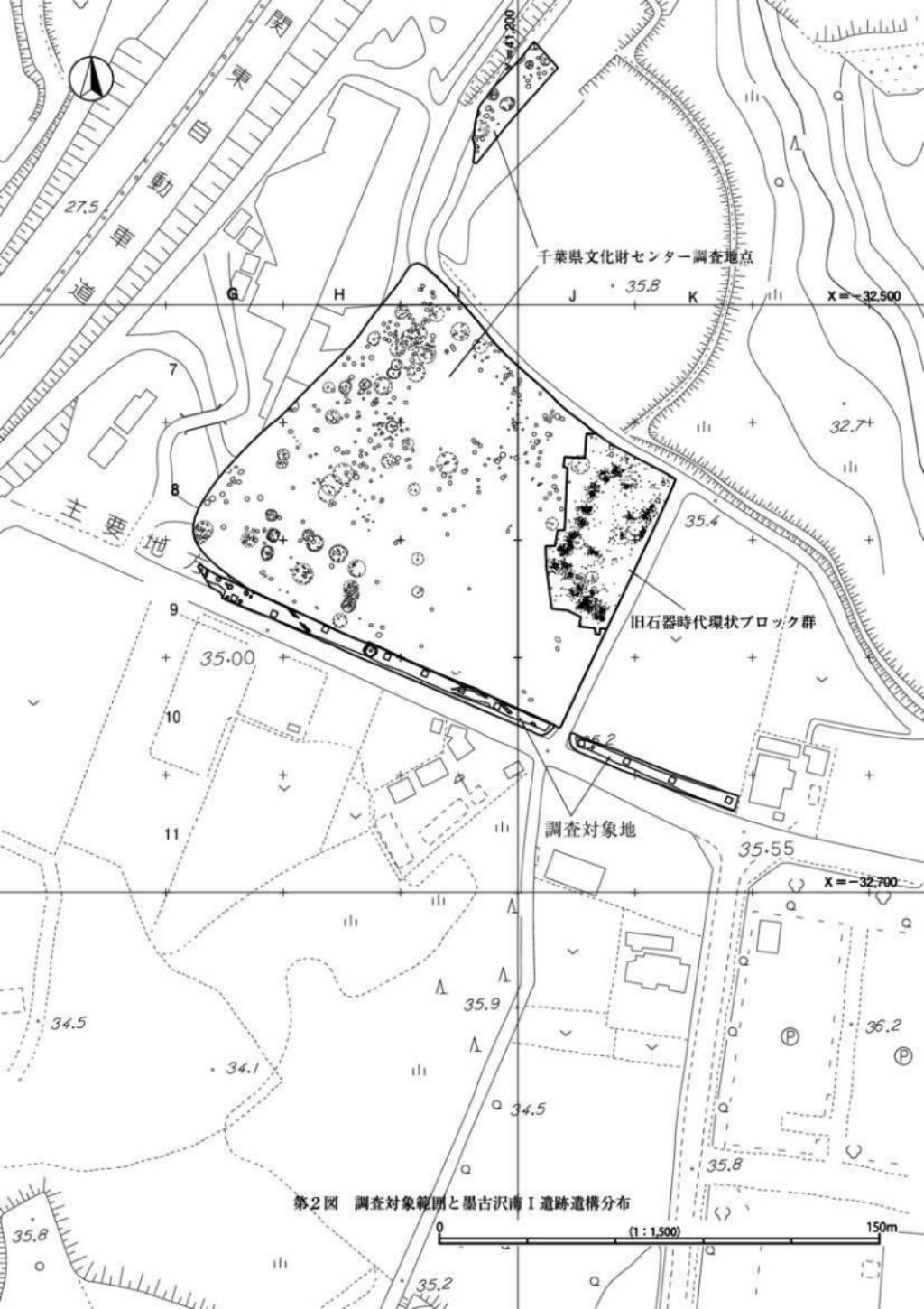
早期の遺跡は、墨古沢南I遺跡(1)・墨古沢遺跡(2)・飯積原山遺跡(6)・墨木戸遺跡(7)・墨新山遺跡(8)が挙げられる。遺構は検出されておらず、遺物のみの出土である。墨古沢南I遺跡では早期後半の条痕文系土器が出土している。墨古沢遺跡・墨木戸遺跡・墨新山遺跡では、断続的ではあるが早期前半撚糸文系土器から後半の条痕文系土器までの出土が認められる。飯積原山遺跡では前半の撚糸文系土器から中葉の沈線文系土器まで出土している。

前期の遺跡は、墨古沢南I遺跡(1)・墨古沢遺跡(2)・墨広畠遺跡(4)・墨古沢北遺跡(5)・飯積原山遺跡(6)・墨木戸遺跡(7)・墨新山遺跡(8)が挙げられる。早期と同じく現状では遺構の検出はなく、遺物のみが出土する状況である。墨古沢南I遺跡では、前期後半の土器が出土している。墨古沢遺跡・墨木戸遺跡では、前期前半から後半の土器が出土している。飯積原山遺跡では、前半から中葉までの土器が出土している。墨広畠遺跡では中葉の土器の出土が認められる。

中期の遺跡は、墨古沢南I遺跡(1)・墨古沢遺跡(2)・墨古沢南II遺跡(3)・墨広畠遺跡(4)・飯積原山遺跡(6)・墨木戸遺跡(7)・墨新山遺跡(8)が挙げられる。各遺跡で遺構が多く認められるようになるのもこの時期である。墨古沢南I遺跡では、中期前半の遺物が出土しているが、集落が形成されるのは中期後半の加曾利E3式からである。加曾利E3式期の遺構が最も多く、その後加曾利E4式にかけて遺構数は減少する傾向にある。墨新山遺跡でも同様の傾向が見られる。墨古沢遺跡では、中期のほぼすべての時期の土器が出土している。五領ヶ台式期の堅穴住居跡は検出されていないが、続く勝坂式・阿玉台式期には堅穴住居跡が構築されるようになる。勝坂式・阿玉台式の後半から加曾利E3式前にかけて、堅穴住居跡をはじめ土坑など遺構数が多くなる。加曾利E3式からは遺構数が減少していく傾向が認められる。飯積原山遺跡・墨木戸遺跡では、勝坂式・阿玉台式終末から加曾利E3式成立期に集落が形成される。両遺跡とも加曾利E3式期の遺構数が最多となる。墨古沢南I遺跡をはじめ、周辺の多くの遺跡で加曾利E3式期に遺構が増加するに対し、墨古沢遺跡では前時期に比べ大幅に減少しており、対照的である。墨広畠遺跡では、中期前半と中期後半に1軒ずつ堅穴住居跡が検出されている。

後期の遺跡は、墨古沢南I遺跡(1)・墨古沢遺跡(2)・墨古沢南II遺跡(3)・墨広畠遺跡(4)・墨古沢北遺跡(5)・飯積原山遺跡(6)・墨木戸遺跡(7)・墨新山遺跡(8)が挙げられる。墨古沢南I遺跡・飯積原山遺跡では、後期初頭称名寺式期の堅穴住居跡が検出されている。この時期以降の遺構はないが、後期前半掘之内式から後半の曾谷・安行式に至るまで、遺物が出土している。墨古沢遺跡では、後期前半掘之内式期の堅穴住居跡が検出されている。この時期以降の遺構はないが、遺物は後期後半まで、まとまって出土している。墨木戸遺跡・墨新山遺跡・墨広畠遺跡では、遺構の検出はない。墨木戸遺跡・墨新山遺跡では、後期初頭から後半までの遺物が出土している。墨広畠遺跡では後期中葉の土器が出土している。

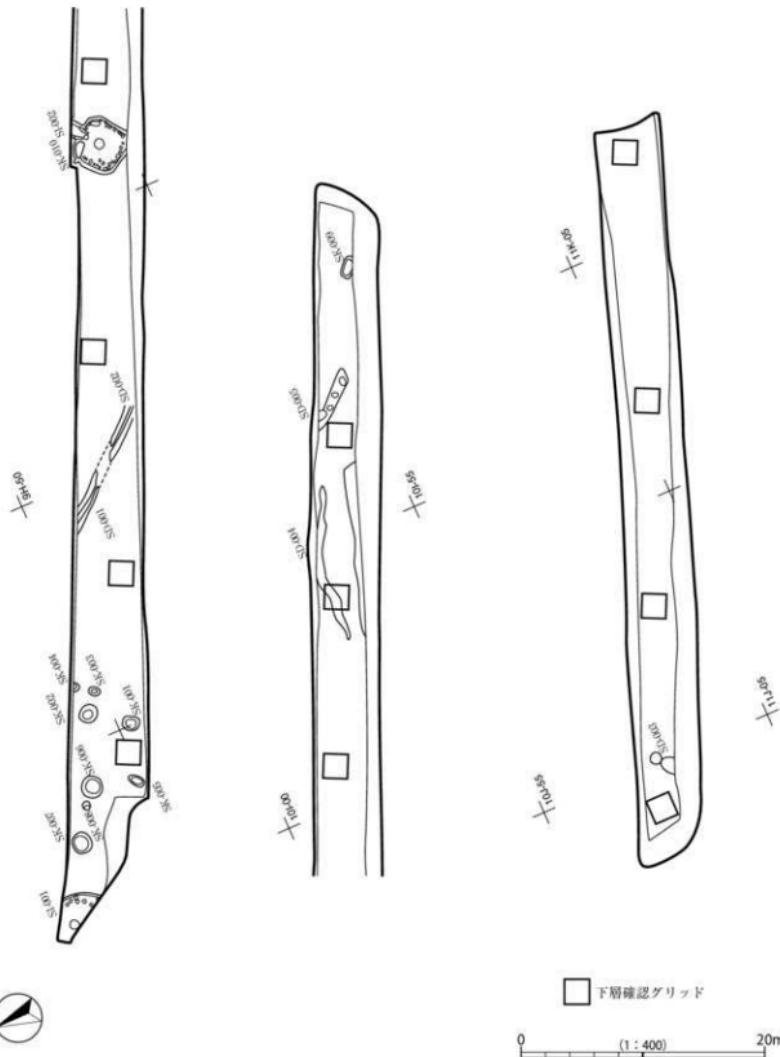
晩期の遺跡は、墨古沢南I遺跡(1)・墨古沢遺跡(2)・墨古沢北遺跡(5)・飯積原山遺跡(6)・墨新山遺跡(8)が挙げられるが、遺構が検出された遺跡はない。墨古沢南I遺跡・飯積原山遺跡・墨新山遺跡では、安行3式が出土している。この時期以降の遺物は出土していない。墨古沢遺跡からは安行3式から千網式までの土器がまとまって出土している。晩期末葉にはこの一帯での活動痕跡は認められない。



第2図 調査対象範囲と墨古沢南I遺跡遺構分布

(1 : 1,500)

150m



第3図 遺構配置図

第2章 調査の成果

第1節 概観

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡2軒、土坑9基、陥穴1基、近世以降と考えられる溝状遺構3条である（第3図）。遺構は調査対象地の西側に多く検出され、東側ではほとんど検出されなかった。隣接する地点では、南東側が大きく削平されていたため、遺構の検出が少ない（千葉県文化財センター2005）とされているが、今回の調査対象地の東側には、多数の攪乱は認められたものの、ソフトローム層は残存しており、調査対象地東側には遺構が存在しないことが確認できた。縄文時代の遺構のほとんどは、中期後半から後期初頭のものと考えられる。

出土遺物は、加曾利E式後半の土器が主体を占め、僅かに諸磯b式・中期中葉の土器・称名寺式が出土している。石器は、石鎚・石鎚未製品・敲石・石皿・石棒・石核・剥片が出土している。石器については属性表にまとめた（第2表）。

なお、加曾利E式土器については細別編年案が数多く出されており、細別呼称に関しては今なお混乱している状況にある。ここではアラビア数字による細別呼称を使用する。体部文様に磨消縄文が施される段階をもって加曾利E3式とし、加曾利E4式については、黒尾和久が指摘する「対向U字文」の成立、麻手状懸垂文の消失（黒尾1995、2004）という点を特徴とする。称名寺式成立後にも残存する加曾利E式については、石井寛（石井1992）が指摘する「加曾利E5式」という細別呼称を用いることもあるが、加曾利E4式との弁別は、微妙な差異による所が大きく、この細別呼称を用いることが適當かどうかは、今後更なる検討を要する。ここでは称名寺式に並行する加曾利E式と表記することとした。

第2節 検出された遺構と遺物

1 竪穴住居跡

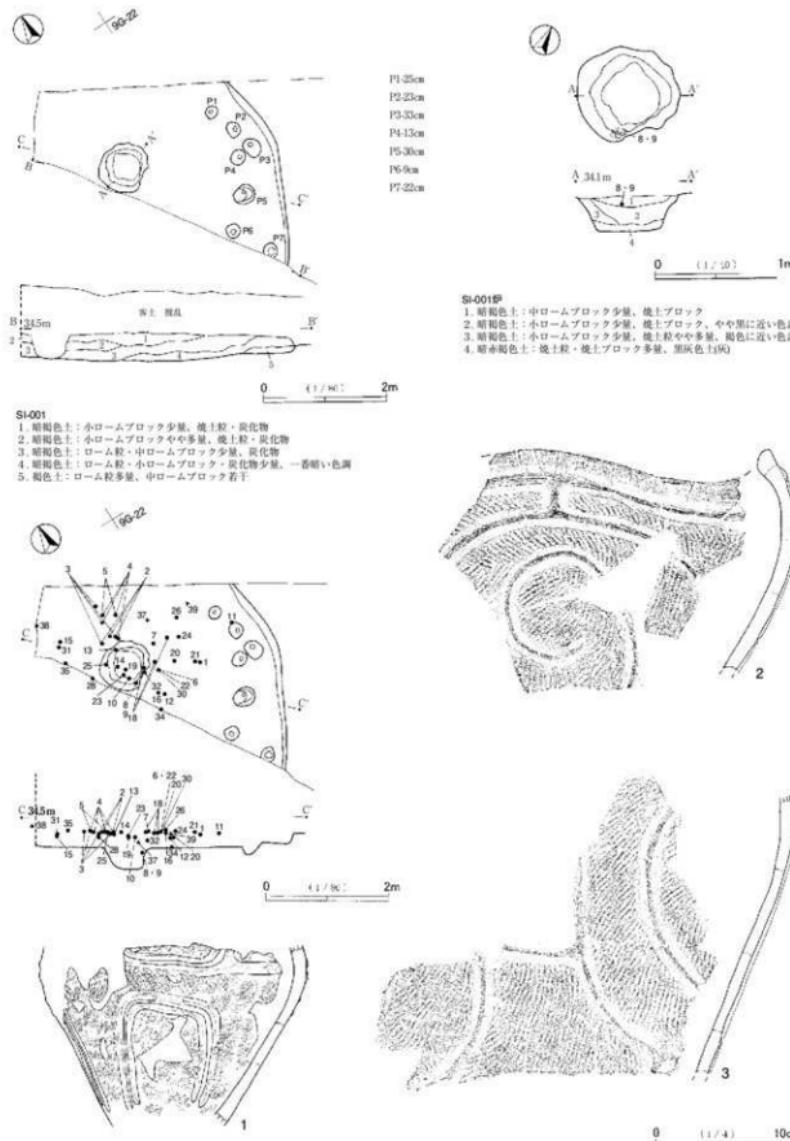
SI-001（第4～6図 図版2・5・6）

9G-21・22・31・32に所在し、大部分が調査区外になる。平面形は検出した形状と、炉の位置や柱穴配置から円形と考えられる。遺構検出面はソフトローム層上面で、壁高は13cm、床面の最も低い部分との比高は27cmである。断面では、ソフトローム層上面より高い部分で覆土が認められ、少なくとも45cmの掘込みがあったことが確認された。覆土は全体的に後世の填土を受けて分層が困難であった。5層が褐色でやや明るいが、その他は暗褐色土でロームブロックや焼土、炭化物を含んでいる。

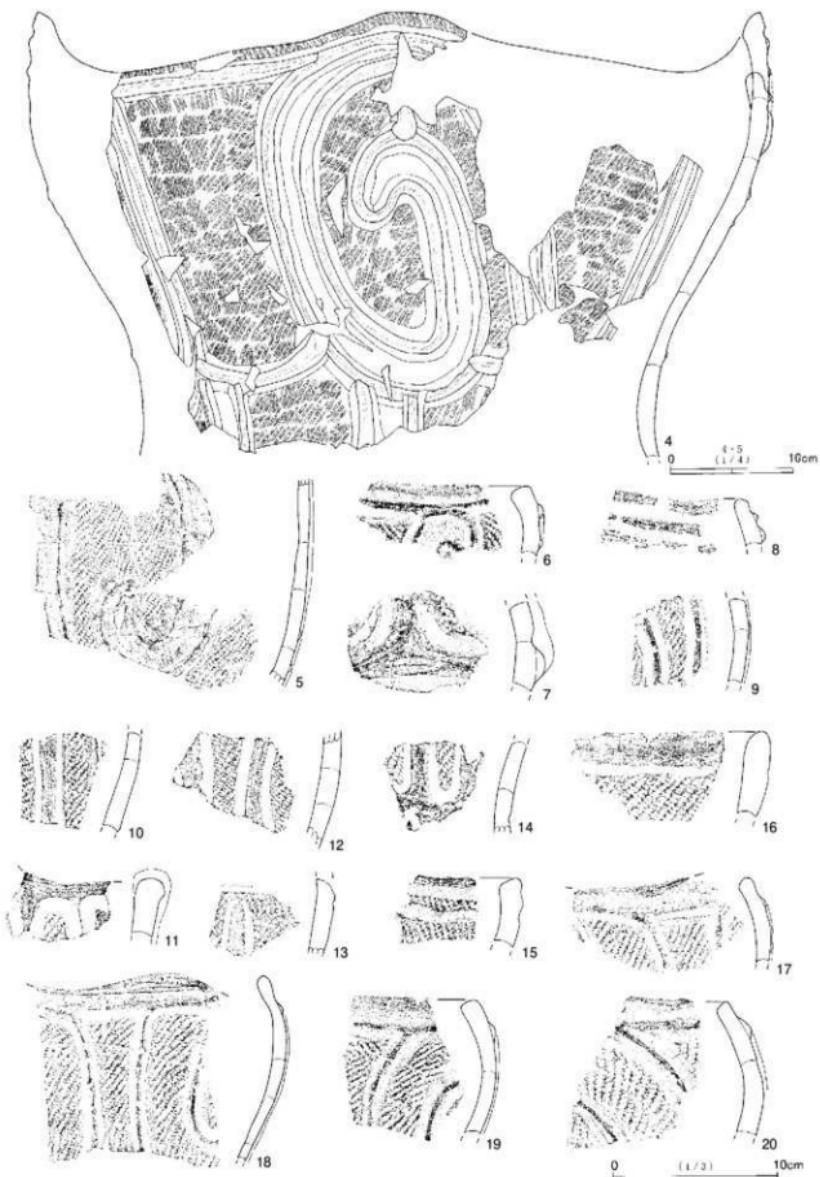
炉は、中央部に構築されていた。規模は長軸85cm、長軸に直行する短軸78cm、深さ29cmである。炉の覆土は、上層は暗褐色土でロームブロックと焼土を含んでいる。最下層は暗赤褐色土で多量の焼土と共に灰が認められた。炉内からは、加曾利E3式の土器（第5図8、9）が出土している。ピットは7基検出されており、P4・P6以外はいずれも深さ20cm以上掘り込まれていることから、これらが柱穴と考えられる。壁面に沿うように配置され、周溝は巡らない。

竪穴住居跡の時期は、出土遺物の大半が加曾利E3式後半の土器であることから、その時期と考える。

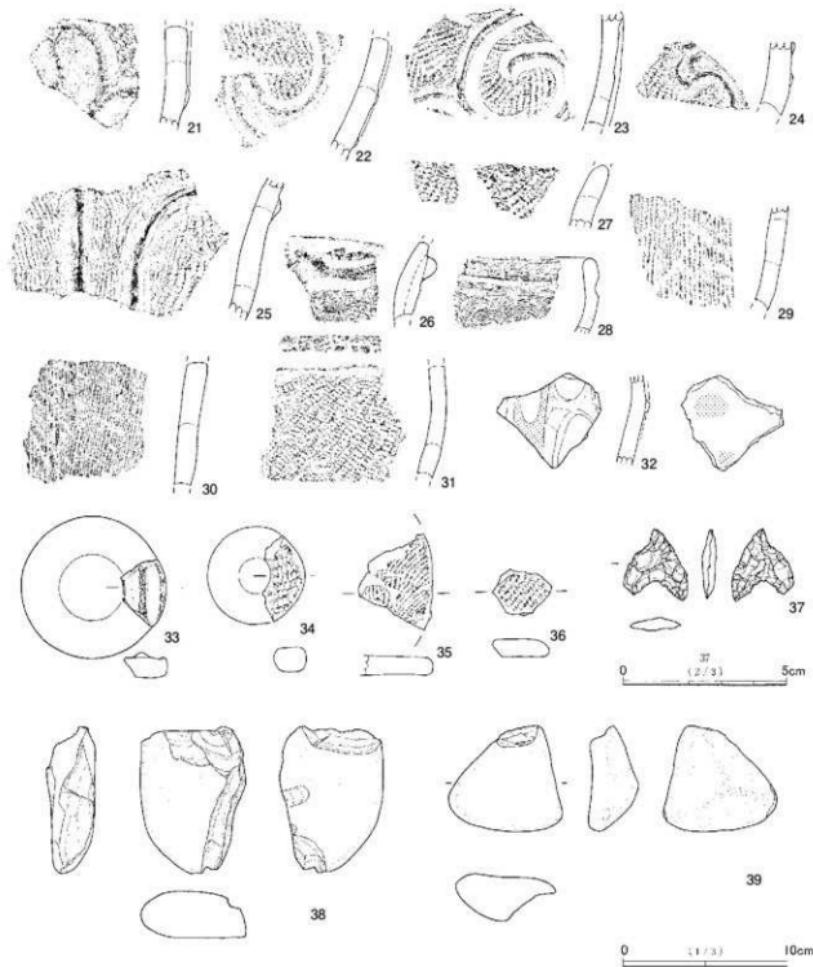
出土遺物は、総数502点（土器497、石器5）で、39点を国示した。遺物は、先述した8・9の土器が炉内、34の有孔円盤が床面から出土した以外は、覆土中層からの出土である。



第4図 SI-001・出土遺物（1）



第5図 SI-001出土遺物（2）



第6図 SI-001出土遺物（3）

出土土器は、いずれも加曾利E式後半のものである。1～5・17～25は加曾利E3式後半に成立する「意匠充填系土器群」（加納1994）である。1は体部下半のみであるが、全周する。2本の隆線が逆U字状に貼り付けられ、隆線脇がナデつけられた後に縦方向の単節繩文RLが施されており、一部は隆線上にも認められる。体部上半の文様と連結させるように單隆線が貼り付けられる。2・3は同一個体である。2は口辺部破片で、緩い波状口縁である。口縁直下は隆線により区画され、口辺部は無文である。体部には単

隆線による渦巻文と単節縄文 RL が施され、隆線脇がナデられて調整される。口辺部と体部を区画する隆線の直下は横方向、その下から縦方向の縄文が施される。4は大形の土器で口辺部から体部上半にかけて約 1/3 が遺存する。細い波状口縁である。波頂部の直下に、2本の隆線で渦巻文が施され、渦巻文間は単隆線で連結され、隆線脇はナデにより調整される。渦巻文の上端とそれを連結する単隆線の脇はやや強くナデられ、口辺部と体部を区画している。隆線脇が調整された後に、単節縄文 RL が施される。縄文は口縁直下の部分を横方向、その下から縦方向に短い間隔で施文される。5は4と同一個体で、体部下半の破片と考えられる。17・20・23・25は、「意匠充填系土器群」の中でも、単隆線で文様が施されるものである。17・20は口辺部破片である。いずれもやや強く内弯する器形であり、口縁直下に横位に単隆線が貼り付けられ、体部と区画される。体部には渦巻文が施されていると考えられる。17・18は同一個体である。23・25は体部破片で屈曲する隆線が認められる。いずれも隆線と縄文が施された後に、隆線脇に沈線またはナデにより調整されている。この中で、17・18・23は体部の隆線脇に沈線が引かれ、一部をナデにより調整される。19・20・25は隆線脇をナデのみで調整されている。いずれも単節縄文 RL が施されるが、25のみ一部に R の無節縄文が認められる。21・22・25は、2本の隆線で渦巻文が施される。隆線脇はナデにより調整されている。6～10は、加曾利 E 3式の中でもやや古い様相を示す。6～8は口辺部の破片である。6・8は口縁直下に隆線が貼り付けられ、隆線脇には沈線が引かれる。6は渦巻文と梢円区画が施され、8は欠損しているため不明であるが、6と同様の文様が施されていると考えられる。7は口辺部文様の下端、隆線で区画され、区画内に単節縄文 RL が認められる。9は8と同一個体である。細い隆線を屈曲させ、隆線脇に沈線が引かれる。10は体部の破片で、単節縄文 RL を地文として2本の沈線で懸垂文が施され、沈線間に磨消が認められる。これらはいずれも口辺部文様が消失する前の段階のものである。11～16は沈線で文様が施される土器である。11は加曾利 E 3式の口辺部破片である。波状口縁になると認められ、口縁は肥厚が認められる。太い沈線で逆 U 字状の区画が作り出され、区画内には単節縄文 RL が認められる。口辺部の文様構成はすでに崩れているものと推測され、加曾利 E 3式後半の土器と考えられる。12は単節縄文 RL 施文後に屈曲する沈線が引かれ、沈線間に磨消が認められる土器である。13は「横位連繋弧線文土器群」(加納 1994) とされるものである。沈線により逆 U 字状の区画が作り出された後に、区画外に単節縄文 RL が施される。縄文は上側が横方向、その直下から縦方向に施文されており、口縁付近の破片であると考えられる。12・13はとともに加曾利 E 3式後半の土器と考えられる。14は体部破片で、沈線による対向 U 字文が認められる加曾利 E 4式の土器である。単節縄文 RL が施された後に、区画する沈線が引かれる。15・16は加曾利 E 3式後半の口辺部破片と考えられるもので、縄文を地文とし、指ナデにより口辺部と体部が区画される土器である。26は体部破片で、粘土板と隆線が貼り付けられ、隆線脇と隆線上に沈線が引かれる。隆線の一部はナデられている。胎土はにぶい黄褐色で、他の土器との差異が著しい。加曾利 E 3式と考えられる。27～30は櫛歯状工具による条線が引かれるもので、加曾利 E 3式から4式にかけてのものと考えられる。27・28は弧状に条線が引かれる。27は弧状に条線が引かれた後に単節縄文 RL が施される。上側の破断面は、意図的に研磨されている。28はナデにより区画され、直下から弧状に条線が引かれる。29・30は縦方向に条線が引かれる。31は加曾利 E 式後半の体部破片で、縦方向の単節縄文 RL が施された後、上側には横位のナデが認められる。破断面には刻みが施される擬口縁である。32は加曾利 E 4式の瓢形の土器と考えられ、隆線と太い沈線で文様が施される。内面と、隆線と沈線の間には赤彩が認められる。

土製品は4点出土し、すべて図示している。33・34は有孔円盤である。33は隆線が貼り付けられ、隆線脇がナデされる。34は単節縄文LRが施される。これらの特徴から、いずれも加曾利E式以降の土器片を用いて製作されたものと考えられる。35・36は土製円盤で、いずれも単節縄文RLが施されている。

石器は3点図示した。37は黒曜石製の石礫である。基部の一部が欠損する。礫先は薄く加工され鋭い。38はホルンフェルス製の石核である。剥片剥離の痕跡が認められる。39は砂岩製の敲石である。形状は三角形で、角になる部分に敲打痕が認められる。正面図上部は敲打による剥落が認められる。

SI-002 (第7~9図 国版2・3・6・7)

9H-85・86・95・96、10H-06に所在する。住居跡の南側と北東側の一部が調査区外に延びているため、全形は確認できなかったが、隅丸方形と考えられる主体部と北東側に張出部を持つ「柄鏡形住居跡」である。主軸はN-55°-Eで、出入口部と想定される張出部は、北東側を向く。遺構検出面はソフトローム層上面で、壁高は22cm、床面の最も低い部分との比高は34cmである。住居跡北西側の壁の一部には、段が認められる。確認面と段の比高は約14cmである。

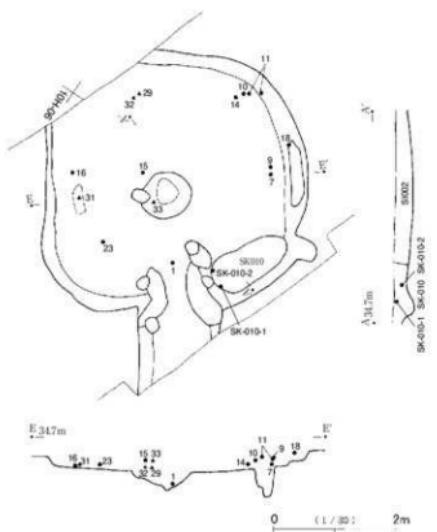
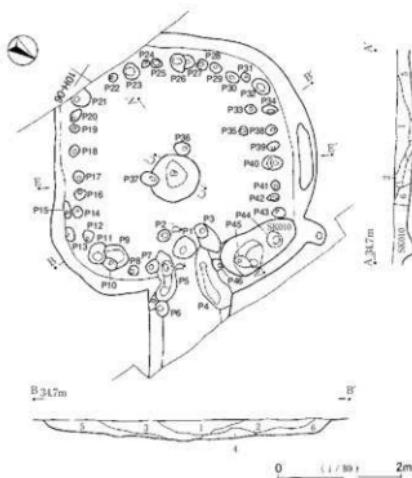
覆土は一部を除いて暗褐色土であり、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物を含んでいる。

炉は住居跡主体部の中央に構築されており、P37と重複している。規模は長軸84cm、長軸に直行する短軸76cm、深さ20cmである。なお炉の底面には、小さな落込み（径12cm、炉底面からの深さ5cm）が認められ、現場段階では炉に伴うと判断したが性格は不明である。覆土は、いずれも焼土粒や焼土ブロックを多く含む暗赤褐色、または赤褐色で、底面付近には焼土と共に灰層が確認された。

床面のピットは46基検出された。P4とP5が連結部に構築される「対ピット」と呼称されているものである。この「対ピット」間にP1からは、埋甕が確認された（第7図1）。埋甕は正位で埋設されていた。ピットは、P36・37が炉付近にあるのを除いて、壁際に沿うように配置されている。またピット数が多いことや、P9・10・11やP26・27のように切合関係を持つものがある点を考慮に入れれば、2回以上の建替えが想定される。周溝は巡らない。

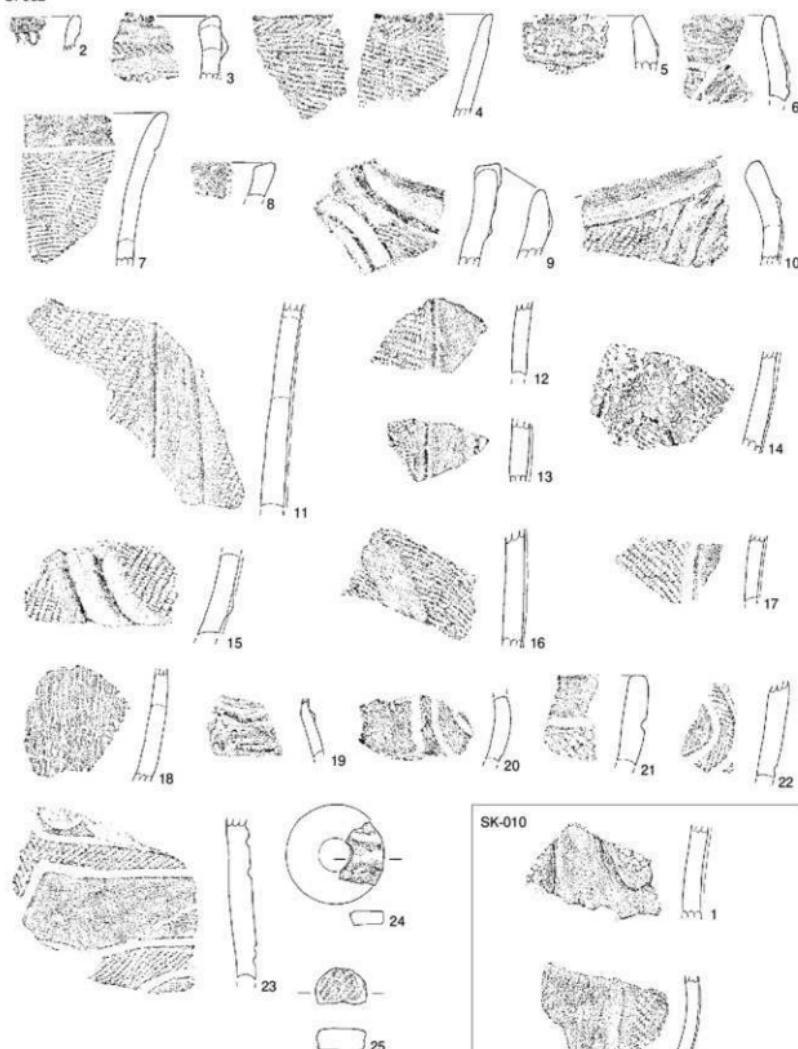
時期は、埋甕が加曾利E式終末期の土器であることから、中期末葉から後期初頭としておきたい。

出土遺物は総数204点（土器172点、石器32点）あり、33点を図示した。1は柄鏡形住居連結部の埋甕である。体部上半から底部にかけて遺存しているが、欠損する部分が多い。体部には単節縄文LRが施される。体部上半は縦方向、体部最大径のある部分では斜方向または横方向に施され、体部下半は無文である。加曾利E式終末期の土器である。2は中期前半の口辺部破片である。口縁直下に大形爪形文が施される。勝坂Ⅲ~IV式、阿玉台Ⅲ式の時期のものだが、型式は特定できない。3は加曾利E式後半の口辺部破片で、隆線が貼り付けられ、隆線脇はナデにより調整された後に、単節縄文RLが横方向に施される。4は埋甕と同一個体と考えられる口辺部破片で、単節縄文LRが口縁直下に横方向、その下から斜方向に施される。5~17は加曾利E式終末期の土器である。5は口辺部破片で、口辺部と体部は口縁直下の屈曲部に貼り付けられた微隆線により、区画される。微隆線以下に単節縄文LRが横方向に施される。縄文は微隆線上にも認められる。器形はほとんど内湾せずに立ち上がるを考えられる。6は口縁直下に横位の微隆線が貼り付けられ、体部に斜位の微隆線が貼り付けられ区画される。隆線脇の一部には沈線が引かれる。単節縄文LRが施される。7は口辺部破片で、口辺部の無文部と縄文部が横位の沈線により区画される土器である。沈線直下から斜方向の単節縄文LRが施され、一部に縄文の端部の結節が認められる。口唇部の一部に平坦面が作り出されている。8は沈線が引かれた後に、口縁直下から目の細かい単

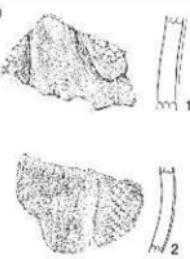


第7図 SI-002・出土遺物（1）、SK-010

SI-002

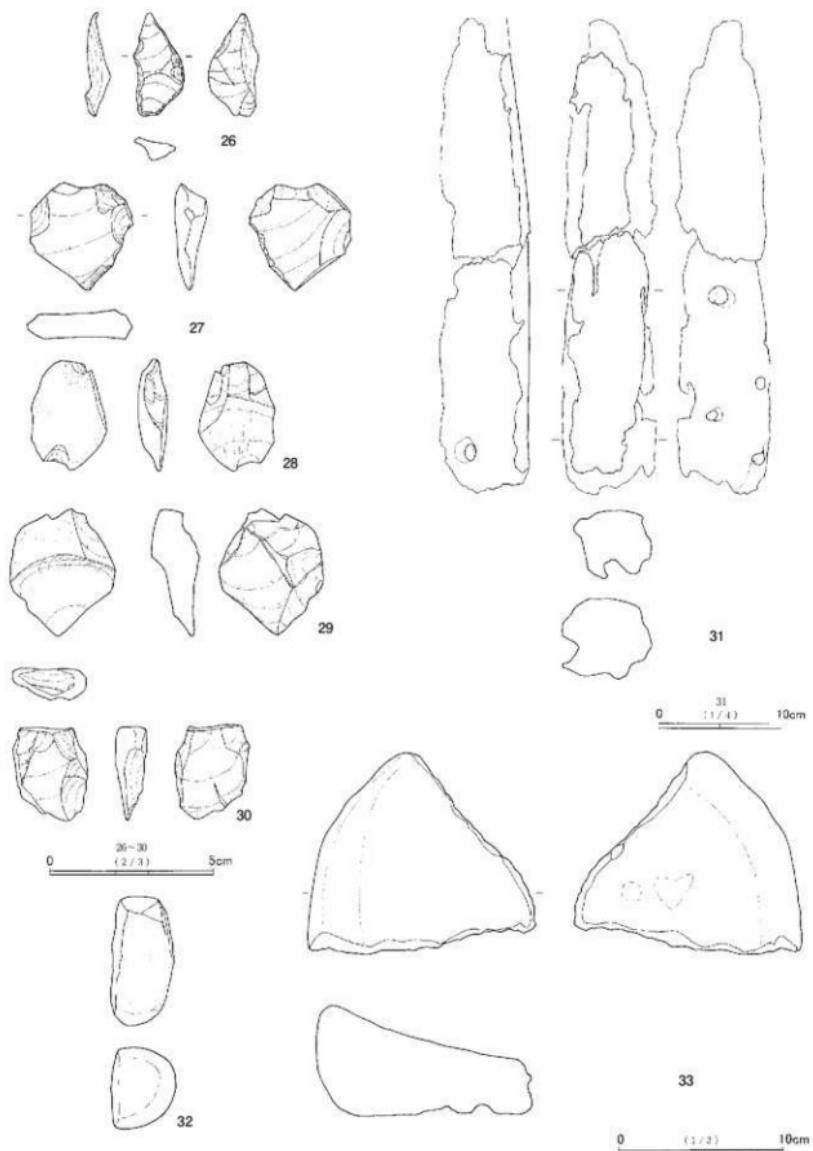


SK-010



0 (1/3) 10cm

第8図 SI-002出土遺物(2)、SK-010出土遺物



第9図 SI-002出土遺物（3）

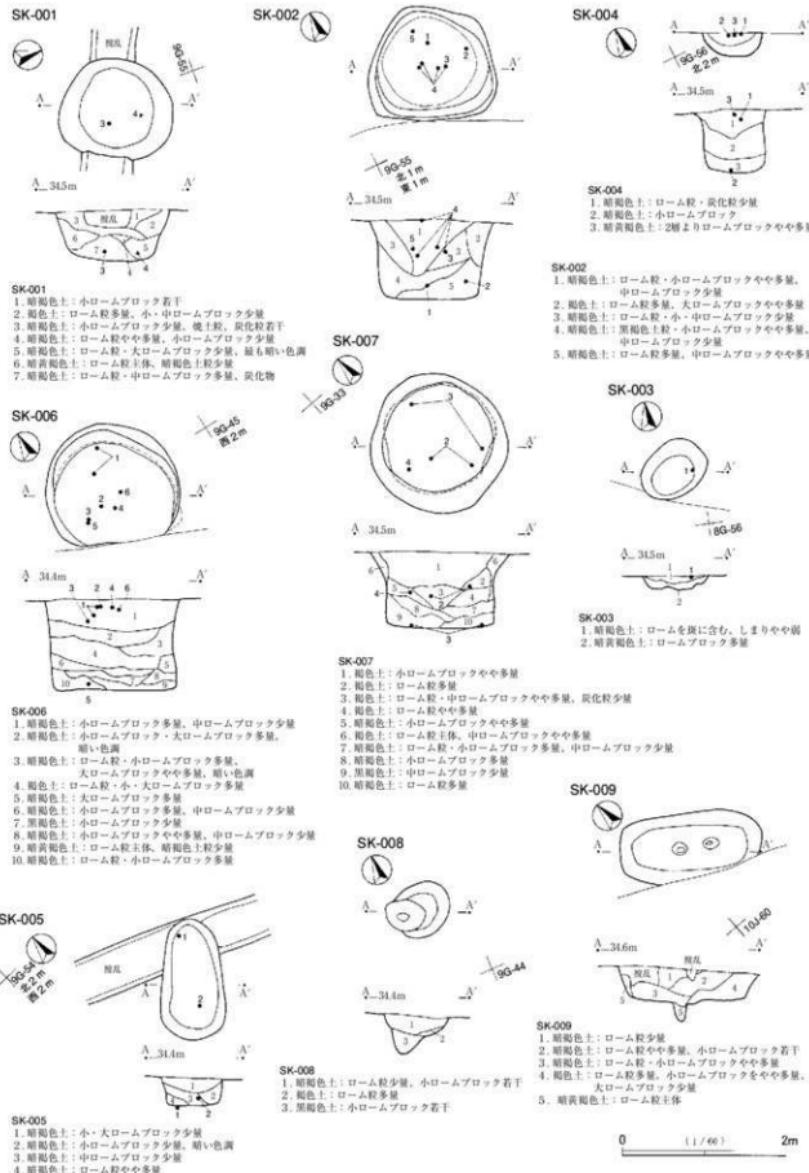
節縄文 LR が横方向、その下から縦方向に施される。7・8は口唇部に平坦面を持つ点から称名寺式に並行する加曾利 E 式と考えられる。9・10は、波状口縁で、波頂部に微隆線による逆 U 字状文が貫入してくれる土器である。器形はほとんど内湾せず、立ち上ると考えられる。隆線脇のナデによる調整は粗雑で、隆線上に縄文が認められる。9は L の無節縄文、10は単節縄文 RL が施されている。称名寺式に並行する加曾利 E 式の可能性が高い。11~18は体部破片である。11~13・17は微隆線による懸垂文で区画され、区画内は無文となる。隆線脇はナデにより調整され、区画外に縄文が施される。11は単節縄文 RL、12・13・17は単節縄文 LR が施される。いずれも加曾利 E 4 式と考えられる。14~16は屈曲する微隆線で区画が作り出される土器である。14は微隆線による逆 U 字文が認められ、対向 U 字文が施されるものと考えられる。区画内に単節縄文 LR が施される。16・17は 2 本の屈曲する微隆線で文様が施される土器である。16は隆線脇が丁寧にナデされるが、17はナデによる調整がほとんどされていない。17は称名寺式に並行する可能性もある。18は櫛歯状工具で縦位に条線が引かれる、加曾利 E 3 式から 4 式にかけての土器である。19は微隆線が貼り付けられ、直下に単節縄文 LR が施される。器壁は薄く体部が強く屈曲する器形で、鉢形もしくは瓢形の土器と考えられる。加曾利 E 4 式と考えられる。20~23は称名寺式第 1 段階の土器と考える。20は屈曲する太い沈線で J 字文が施されていると考える。J 字文の下端に横位の沈線が認められることから、文様間は横位に連結されていると想定される。縄文は施されず、沈線による内面突出も認められない。21は口辺部破片で、口唇部に平坦面を持つ。横位の太い沈線と単節縄文 LR が認められる。22は帶縄文で J 字文が施されているものと考えられる。23は J 字文と方形区画が多段に施文されるもので、区画の一部に乱れが生じている。21~23は、時期的に 1 段階下る可能性もある。

土製品は 2 点出土し、全点図示した。24は有孔円盤である。2 本の微隆線が施され、隆線脇の片側には沈線が引かれる。25は土製円盤である。単節縄文 RL が施されている。いずれも中期の土器片を使用したものと考えられる。

石器は 8 点を図示した。26はチャート製の石錐未製品である。青灰色を基調とする石質である。錐先を加工した痕跡が認められるが、製作中途で中央部から欠損している。27は二次加工されたチャート製の剥片である。青灰色を基調とし、節理が不規則に混入する石質である。片側縁に加工が認められる。28・29は原礫面を残す剥片で、石材は 28 がチャート（灰色を基調とする石質）、29が安山岩である。30はチャート製の剥片で二次加工が認められる。青灰色を基調とし、節理が不規則に混入する石質である。31は片岩（おそらく緑泥片岩）製の石棒である。床面より少し浮いた状態で出土した。全面に熱を受けているため、摩耗や剥落が激しい。一部表面が残存しているが、ほとんどが欠損しているため、全体の形状は不明である。石棒には直径約 2 cm の凹みが 5 か所認められ、転用されたものと考えられる。凹みの部分にも強い熱を受けた痕が認められる。32は砂岩製の敲石である。正面図左側は欠損が認められる。両面はよく磨かれていることから、磨石・敲石の両者として使用されたものが、剥落により敲石の使用に限定されたものと考えられる。33は玄武岩製の石皿片である。破断面を除く全面がよく研磨されている。裏面には直径約 2 cm の凹みが 3 か所認められる。

2 土坑

土坑としたものは、9 基検出されている。土坑はその形態や深さから 2 種類に分類できる。①平面形が円形、確認面からの深さが 60cm 以上で貯蔵穴の用途が想定できるもの、②その他のものである。9 基



第10図 SK-001～SK-008土坑、SK-009陥穴

の中で①にあたるのは、SK-001・002・004・006・007である。特にSK-002・006・007は規模も大きく、深さも100cm前後で、底面付近はオーバーハング状に構築されている。②としたものは、SK-003・005・008・010である。いずれも小規模なものである。

SK-001 (第10・11図 図版3・7)

9 G-54・55に所在する。規模は長軸1.42m、短軸1.25m、確認面からの深さ63cmである。土坑の中央部が溝状の擾乱で壊されているため、図上ではややゆがんだ形をしているが、本来は円形を呈していたものと考えられる。壁はやや緩く立ち上がる。覆土中にロームブロックの外、炭化物、焼土が混じる。遺物は、覆土中より出土しており、多くが加曾利E式終末期の土器であることから、土坑の時期は中期末から後期初頭と考えられる。

出土遺物は33点あり、4点を図示した。1～3は加曾利E式終末期の土器である。1は微隆線による逆U字状区画が認められ、区画内には単節縄文LRが施される。隆線脇のナデは粗雑である。内面には炭化物が付着している。2は縦位の微隆線で区画され、単節縄文RLが施される。縄文は隆線上にも認められる。1・2は隆線脇のナデによる調整が粗雑である点から、称名寺式に並行する加曾利E式土器の可能性もある。3は口縁に付される突起で、貫通する孔と隆線で「8」字状の文様が施される。突起直下には、欠損しているが懸架状と考えられる把手が認められる。4は流紋岩製の石鎚である。正三角形に近い形で、基部が凹基である。鍔先の一部が欠損する。裏面には主要剥離面が残存している。

SK-002 (第10・11図 図版4・7)

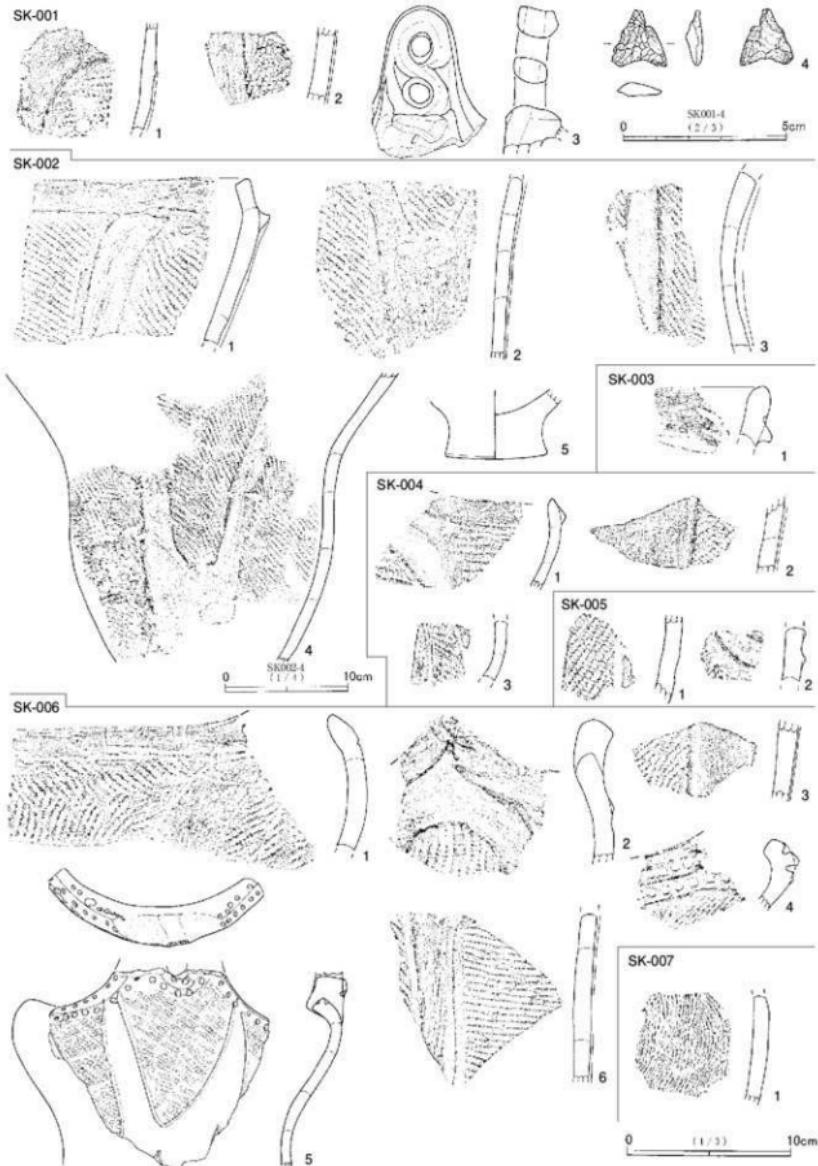
9 G-45に所在する。規模は長軸1.69m、短軸1.60m、確認面からの深さ98cmの大形の土坑である。土坑の北西側は、溝状の擾乱で僅かに壊されている。このためややいびつな形であるが、本来は円形に近い平面形であったと推測される。壁は、底面から約60cmのところまではほぼ垂直に立ち上がり、そこから斜めに開くように立ち上がる。出土遺物の多くは加曾利E式終末期の土器で、称名寺式に並行すると考えられる土器も出土している。土坑の時期は後期初頭の可能性が高い。

出土遺物は41点あり、5点を図示した。1～4は加曾利E式終末期の土器である。1は口辺部破片で平縁である。口縁直下に横位の微隆線が貼り付けられ、区画される。この隆線に重なるように、2本の微隆線で逆U字状の区画が作り出される。口辺部を区画する隆線と重なる部分では、突起状になる。隆線間以外には単節縄文LRが施される。称名寺式に並行する加曾利E式と考える。2は体部破片で、器形のくびれる部分である。隆線が「U」字状、縦位に貼り付けられ、区画が作り出され、区画内にLの無節縄文が施される。隆線脇は丁寧にナデられている。3も2と同様の部位で、2本の隆線が縦位に貼り付けられ、単節縄文LRが施される。縄文は隆線上にも認められる。4は微隆線により入り組んだ対向U字文が施される。区画内と隆線上には単節縄文LRが施される。2・3の型式認定は難しいが、4は対向U字文の入り組む様相や隆線脇の調整等から称名寺式に並行する加曾利E式と考える。5は底径6.3cmの底部破片で、底面から2cmほど立ち上がり、その上から外反する。加曾利E3式から4式と考えられる。

SK-003 (第10・11図 図版4・8)

9 G-45・46に所在する。長軸0.85m、短軸0.64m、確認面からの深さは17cmである。平面形は梢円形で、壁はやや斜めに開きながら立ち上がる。底面は平坦ではなく、波打っている。遺物が少なく、土坑の時期は明確ではないが、出土遺物から加曾利E3式期の可能性が高い。

出土遺物は3点あり、1点を図示した。1は、口辺部破片で隆線が貼り付けられ、隆線脇に沈線が引か



第11図 SK-001～SK-007出土遺物

れる。上方向から隆線脇を抉る刺突が1か所認められる。加曾利E式と考えられる。

SK-004 (第10・11図 図版4・8)

9G-46に所在する。遺構の半分以上が調査区外になるが、調査した部分での平面形から、円形と推測される。調査部分での長軸0.74cm、短軸0.29cm、深さは調査区断面で77cmである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で斜めに開く。覆土にロームブロックと炭化物が混じる。土坑底面に近い位置から出土している第11図2は、称名寺式に並行する加曾利E式の可能性もあるが、破片であり判然としない。土坑の時期は中期末葉から後期初頭としておく。

出土遺物は6点あり、3点を図示した。すべて加曾利E式終末期の土器である。1は口辺部破片で波状を呈する。口辺の屈曲する部分に横位の微隆線が貼り付けられ、区画される。体部には屈曲する2本の微隆線が貼り付けられ、隆線間は無文となる。単節縄文RLが認められる。2は縦位の微隆線が貼り付けられ、単節縄文RLが施される。隆線には粗雑なナデが認められる。3は細い沈線で区画され、区画内に単節縄文RLが施される。対向U字文の一部と考えられる。

SK-005 (第10・11図 図版4・8)

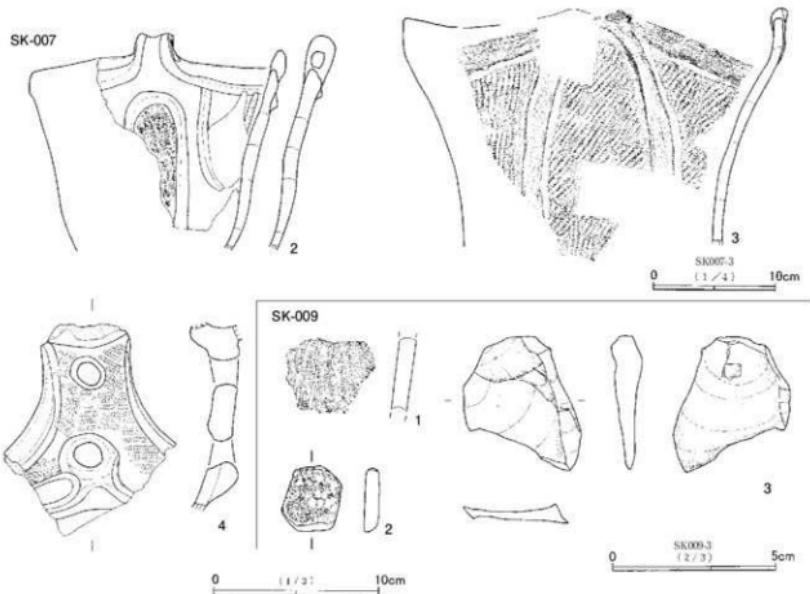
9G-43・44・53に所在する。長軸1.48m、短軸0.82m、確認面からの深さは34cmである。平面形は長楕円形で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。出土土器はいずれも小破片であり、土坑の明確な時期は不明だが、加曾利E式後半期の可能性が高いと考える。

遺物は5点出土し、2点を図示した。1は加曾利E3式である。単節縄文RLと沈線による懸垂文が施され、磨消縄文が認められる。2は加曾利E4式である。2本の屈曲する隆線が貼り付けられ、隆線脇はナデにより丁寧に調整される。単節縄文RLが認められる。

SK-006 (第10・11図 図版4・8)

9G-33・34・43・44に所在する。規模は長軸1.65m、短軸1.63m、確認面からの深さ113cmである。土坑の南西側を溝状の擾乱で僅かに壊される。平面形は円形で、底面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、底面付近ではオーバーハング状に構築される。出土土器の多くは、加曾利E式終末期である。覆土下層からは加曾利E4式と考えられる大型の破片（第11図5）が出土していることから、土坑の廃絶時期は加曾利E4式と考えられるが、覆土上層の埋没時期は後期初頭の可能性がある。

出土遺物は20点あり、6点を図示した。すべて加曾利E式終末期の土器である。1は口辺部破片である。口縁直下の横位沈線により区画され、体部から屈曲する沈線が引かれ、区画する横位沈線と重なる。この重なる部分の直上に突起が付されていたと考えられる。単節縄文RLが横位沈線の直下は横方向、その下から縦方向に施される。称名寺式に並行する加曾利E式である。2は口辺部破片で波状口縁である。波頂部は外反する。その直下には逆U字状の隆線により区画され、区画内に単節縄文RLが施される。3は縦位の隆線と単節縄文RLが施される。2・3は縄文が隆線上にも施される。4は口辺部破片で波状口縁を呈し、微隆線が貼り付けられ、口縁に沿うように2列の刺突が施される。直下に屈曲する沈線と単節縄文RLが施される。加曾利E式終末期としたが、後期初頭の「関沢類型」（石井1992）の可能性もある。5は器形がキャリバー形の土器である。突起は欠損しているが、円孔を持つものが施されていたと考えられる。口縁に沿うように円形刺突が3列施され、1列は口辺内面に認められる。体部には沈線による対向U字文と単節縄文LRによる充填縄文が認められる。内面には炭化物が付着している。6は2本の縦位の微隆線が貼り付けられ、隆線間は無文となる。隆線脇は丁寧にナデられる。単節縄文RLが認められる。5・



第12図 SK-007・SK-009出土遺物

6は加曾利E式である。

SK-007 (第10～12図 図版4・8)

9G-33に所在する。規模は長軸1.75m、短軸1.67m、確認面からの深さ92cmである。平面形は円形で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で斜めに聞くように立ち上がる。底面付近では一部オーバーハング状に構築されている。覆土は、ロームブロックの外に炭化物が混じる。

出土遺物の多くは加曾利E式終末期のものである。底面付近から出土した半完形個体(第12図3)は、称名寺式に並行する加曾利E式土器と考えられ、土坑の時期は後期初頭の可能性が高い。

出土遺物は23点あり、4点を図示した。1は加曾利E3式から4式にかけての土器で、櫛歯状工具による蛇行する条線が施される。2～4は加曾利E式終末期の土器である。2は口縁に懸架状の把手と突起が付され、これらをつなぐ隆線で口辺部と体部が区画される。体部には隆線による入り組んだ対向U字形が施され、U字形の区画内には、単節繩文LRが施される。3は小波状口縁で横位の微隆線により口辺部と体部が区画される。体部には微隆線による対向U字形が施され、逆U字形の区画が口辺まで貫入する。区画内には単節繩文RLが施され、隆線脇は丁寧にナデられる。2・3は文様構成や、内湾せず立ち上がる器形を呈することから、称名寺式に並行する加曾利E式と考える。4は口縁に取り付けられた把手で、上部を欠損する。2つの貫通する孔とその周間に微隆線が貼り付けられる。下方の孔の直下には粘土が貼り付けられ、突起となる。隆線脇は丁寧にナデられて調整される。0段多条の繩文LRが認められる。

SK-008 (第10図 図版4)

9G-33に所在する。当初1基の土坑と考えていたが、断面の観察から2基の土坑が重複したものと判断した。西側に展開する土坑をSK-008a、東側に展開する土坑をSK-008bとした。規模は、SK-008aが長軸0.48m、短軸0.40m、確認面からの深さ22cmで、SK-008bは長軸0.75m、短軸0.65m、確認面からの深さ47cmである。SK-008aよりもSK-008bの方が新しい。SK-008aは、断面がタライ状である。SK-008bは、底面が小さく壁は斜めに立ち上がる。土坑の時期は、時期を示す出土遺物が無く、不明である。

出土遺物は土器の小破片1点のみであり、図示できなかった。

SK-010 (第7・8図 図版6)

SI-002の北側で重複し、SI-002内にすべて納まる。当初、SI-002に重複する何らかの遺構の存在を認めだが、平面形等は不明瞭であった。セクションベルトの観察でSI-002の埋没後に掘り込まれた土坑と確認した。底面が楕円形であることから、平面形が楕円形の土坑であったと考えられる。底面の規模は長軸1.36m、短軸0.59m、深さは確認面から最も深いところで35cmである。底面は一部深い部分があるが、SI-002の床面とほぼ同一の高さに構築されている。土坑の時期は、出土遺物からみてSI-002の時期と大差ない。のことからSI-002の埋没が完了してすぐの時期に掘り返されたものと考えられる。SI-002覆土中に称名寺式土器やそれに並行すると考えられる加曾利E式土器が出土していることから、後期初頭としておきたい。

出土遺物に関して、出土位置の記録から、この土坑に属する遺物として3点抽出することができ、内2点を図示した(第8図1・2)。1・2は加曾利E式終末期の土器で、微隆線により区画され、区画内に縄文が施される。微隆線脇は、ナデにより調整される。施される縄文は1がRL、2がLRである。小破片のため後期に下るかの判断は難しい。

3 隘穴

SK-009 (第10・12図 図版4・8)

10I-59、10J-50に所在する。規模は長軸1.75m、短軸0.80m、確認面からの深さ44cmである。平面形は楕円形で、底面には2基のビットが長軸方向に並んでいる。ビットは底面から深さ20cmである。壁は底面からやや緩やかに立ち上がる。土坑の時期は、時期のわかる出土遺物が少ないため、不明である。

出土遺物は7点あり、3点を図示した(第12図)。1は体部破片で擦痕のような調整痕が認められる。加曾利E式後半の可能性が高い。2は土器片錐である。全体的に摩耗が激しく、僅かに紐かけ痕が認められる。3はチャート製の剥片である。青灰色を基調とし節理が複雑に混入する石質である。

4 遺構外出土遺物 (第13図、図版8)

遺構外からは、総数182点(土器180、石器2)の遺物が出土しており、すべて縄文時代である。出土地点と点数は、9G-55が45点、9G-69が26点、9H-61が74点、9H-70が36点、攪乱が1点である。遺物も遺構の多い西側に偏在する傾向が認められる。

1は前期後半の諸磯b式の口辺部破片である。口縁直下に2列の爪形の刺突列と単節縄文RLが施される。2~6は加曾利E3式と考える。2は単節縄文RLに2本の沈線による懸垂文が施され、沈線間は磨り消される。3は波状口縁で、強く内湾する。波頂部直下に円形の押圧が施され、U字状に隆線が2本貼



第13図 遺構外出土遺物

り付けられることで、口辺部文様が構成されていると考えられる。隆線貼り付け後に単節縄文 RL が施され、体部に 2 本の沈線による懸垂文が引かれ、沈線間が磨り消される。加曾利 E 3 式と考えるが、口縁直下の隆線は区画である可能性、体部文様の下半は懸垂文ではない可能性もあり、加曾利 E 4 式の可能性もある。4・5 は「意匠充填系土器群」とされるもので、いずれも隆線と単節縄文 RL が施され、隆線脇がナデにより調整されている。6 は「横位連繋弧線文土器群」とされる口辺部破片である。沈線で弧状に区画され、区画内は無文である。口縁直下は、単節縄文 RL を横方向、それ以下は縱方向に施される。7~10 は加曾利 E 4 式と考えられる。7 は口辺部破片で、口縁が内屈する。屈折する部分に隆線が貼り付けられ、区画される。突起が 2 つ付けられ、隆線下を RLR の複節縄文を横方向、それ以下は縱方向で施される。沈線による逆 V 字状の区画が、口辺部の突起に向かって施される。区画内は無文である。8 は単節縄文 RL が施された後、太い沈線で逆 U 字状に区画される。9・10 は隆線で区画され、縄文施文後に隆線脇が粗雑にナデられて調整される。縄文は 9 が LR、10 が RL である。11 は加曾利 E 3 式に伴うと考えられる鉢形土器の体部破片である。器壁は薄く、沈線で庶手状の文様が施される。12 は口縁に

第2表 出土石器属性表

神岡番号	出土位置	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
第6図 5	SI-001	石鏡	黒曜石	20.7	19.7	3.4	1.1	
第6図 38	SI-001	石鏡	ホルンフェルス	87.8	65.3	29.0	223.8	
第6図 39	SI-001	磁石	砂岩	66.3	68.9	28.5	127.7	
第9図 26	SI-002	石鏡未製品	チャート	31.1	16.0	6.8	2.5	
第9図 27	SI-002	二次加工剥片	チャート	33.4	31.9	8.8	9.0	
第9図 28	SI-002	剥片	チャート	33.5	23.6	9.2	8.2	原理面あり
第9図 29	SI-002	剥片	安山岩	39.1	32.7	14.8	10.8	
第9図 30	SI-002	二次加工剥片	チャート	28.8	22.0	9.2	6.9	
第9図 31	SI-002	石棒	片岩	391.0	77.0	74.0	2150.0	被熱
第9図 32	SI-002	敲石	砂岩	80.0	40.5	49.2	237.9	
第9図 33	SI-002	石鏡	玄武岩	139.0	126.0	68.0	1000.0	
第11図 4	SK-001	石鏡	流紋岩	17.0	15.8	3.9	0.8	
第12図 3	SK-009	剥片	チャート	42.4	34.7	8.2	8.9	
第13図 15	9H-70	石鏡未製品	砂岩	31.0	23.8	6.2	5.6	
以上非掲載	SI-001	剥片	黒曜石	11.6	10.8	11.4	1.7	
	SI-001	剥片	ホルンフェルス	14.0	17.8	3.5	0.9	
	SI-002	剥片	ホルンフェルス	29.8	27.8	3.1	1.5	
	SI-002	剥片	玉髓	19.6	9.2	6.5	0.9	
	SI-002	剥片	黒曜石	12.8	11.2	3.6	0.5	
	SI-002	剥片	黒曜石	9.6	8.0	2.9	0.3	
	SI-002	剥片	黒曜石	28.3	11.2	7.2	2.6	
	SI-002	剥片	黒曜石	14.6	10.0	1.8	0.3	
	SI-002	剥片	黒曜石	14.9	11.9	6.1	0.6	
	SI-002	剥片	チャート	12.8	13.8	6.5	0.9	
	SI-002	剥片	チャート	19.5	13.4	2.3	1.0	
	SI-002	剥片	チャート	20.1	12.3	3.5	0.8	
	SI-002	剥片	チャート	8.9	8.2	1.1	0.1	
	SI-002	剥片	ホルンフェルス	13.0	14.8	3.8	0.6	
	SI-002	剥片	ホルンフェルス	29.5	17.4	3.8	2.0	
	SI-002	剥片	流紋岩	24.9	15.3	9.9	4.8	
	SI-002	剥片	流紋岩	29.2	18.7	7.8	4.9	被熱
	SI-002	剥片	流紋岩	12.9	11.3	2.1	0.2	
	SI-002	剥片	安山岩	20.1	9.9	12.7	0.5	
	SI-002	剥片	ホルンフェルス	10.4	10.4	2.8	0.3	
	SI-002	剥片	ホルンフェルス	17.3	13.5	4.7	0.8	
	SI-002	剥片	ホルンフェルス	19.5	15.6	2.6	0.8	
	SI-002	剥片	ホルンフェルス	17.6	13.1	3.5	0.8	
	SI-002	剥片	ホルンフェルス	14.5	8.7	2.0	0.2	
	SI-002	剥片	ホルンフェルス	14.1	11.1	1.7	0.3	
	SI-002	剥片	ホルンフェルス	12.1	10.8	2.0	0.2	
	SK-009	剥片	黒曜石	31.5	28.6	14.0	15.6	
	SK-009	剥片	ホルンフェルス	22.5	20.5	3.7	1.6	
	SK-009	剥片	安山岩	9.5	11.9	2.3	0.3	

付く把手で、動物の顔を模したものと考えられる。眼孔は半截竹管で抉ることで作り出されている。突端部から眼孔部分にかけて沈線が引かれ、口を表現していると考えられる。把手の下面には眼孔と同様の手法で文様が施され、細い棒状工具による屈曲した沈線で、文様と口の突端部を連結させている。把手の側面を除くほぼ全面に0段多条の縄文LRが施される。把手の下側は器面が剥離しているため不明である。中期末葉から後期初頭のものと考えられる。13・14は加曾利E3式から4式のものである。13は底部で上げ底となっている。接地面は摩耗が激しい。14は櫛齒状工具で蛇行する条線が施される。内面は全面に赤彩が認められる。

15は砂岩製の石鎚の未製品である。形状は二等辺三角形で、主要剥離面と蝶面が残存している。調整は周縁のみに認められる。

5 溝状遺構（第3図）

近世以降の溝状遺構は5条検出されているが、この内SD-001・002は、表土層から掘り込まれており近代と考えられるため、ここでは扱わない。溝をはじめ、遺構外からもこの時期の遺物は出土していない。
SD-003

10J-74・75に所在する。同じ覆土の土坑が近接して検出されたことから、溝を伴う柵列の可能性があると判断した。搅乱により溝の底面は壊されており、底面に掘り込まれたピットしか確認できなかった。北東から南西方向に延びると考えられ、南西側は調査区外に延びている。規模は最大幅1.2m、現状での総延長2.44m、確認面からの深さ35cmである。

SD-004

10I-23～25・35・36に所在する。西側は東西方向に延び、調査区外で南東方向に屈折し、延びている。最大幅0.8m、確認面からの深さ22cmである。総延長13.46mである。溝は端部に向かって幅が狭くなり、深さも浅くなっていくため確認できなくなる。

SD-005

10I-37・47・48に所在する。北西から南東方向に延びる。北側は調査区外に延び、南側は搅乱を受けている。溝の底面には径40cmから70cmのピットが連なるように掘り込まれている。規模は現状での総延長4.40m、最大幅1m、確認面からの深さ12cmである。ピットは底面から11cm～18cmの深さで、径が大きいピットほど深く掘り込まれている。

第3章 総 括

今回の調査では、860m²の調査範囲の中に、縄文時代の竪穴住居跡2軒、土坑9基（貯蔵穴と考えられる大形の土坑5基、小形の土坑4基）、陥穴1基、近世以降の溝状遺構3条を検出した。第1章で述べたとおり、遺構は調査区の西側に遍在する傾向が認められた。北側に隣接する過去の調査地点では、南東側がハードローム層上面まで削平を受けていたため、上層遺構の遺存状況は不良であったと報告されている（千葉県文化財センター 2005）。今回の調査では、その延長上にある東側の調査地点は、搅乱が多いながらもソフトローム層は残存していた。このことから遺構は西側では続していくが、東側にはほとんど展開しないことが確認できた。また過去の調査地点における北側部分では、旧石器時代の大規模な環状ブロック群が検出されているが、今回の調査において旧石器時代の遺物の出土はなかったことから、環状ブロック群は南側には展開しないことが確認された。

検出された縄文時代の遺構は、時期別に見ると、加曽利E3式期ではSI-001・SK-003、加曽利E式終末期ではSI-002・SK-001・002・004・006・007、中期後半から末葉としたSK-005、時期不明としたSK-008・009となる。遺構が構築される時期は、加曽利E3式から終末期にかけてであり、他の時期に関しては遺物もほとんど出土しない状況であった。こうした傾向は、過去の調査成果とも概ね符合する。過去の調査成果では、竪穴住居跡58軒、竪穴状遺構1基、炉跡4基、陥穴7基、土坑278基、ピット群を検出すると共に、北西側にはいわゆる「中央広場」と考えられるものも確認されている。集落は加曽利E3式から形成されはじめ、称名寺式古段階で終焉を迎えており、比較的短期間に集落が營まれていたことがわかる。また時期別に見ると加曽利E3式期に最も多く遺構が構築され、加曽利E4式期に遺構数は減少し、称名寺式期では住居跡数だけでいえば2軒にまで落ち込んでいる。こうした集落の活動状況が今回の調査した遺構の遺物出土状況にも反映されていると考える。今回調査された2軒の住居跡のうち、SI-001は大部分が調査区外にかかっており、調査できたのは全体の20%程度であるが、SI-002は、全体の80%近くが調査できた。調査面積はSI-002の方が圧倒的に広いのに対し、遺物出土量はSI-001が502点、SI-002が204点と2倍以上の差が認められた。またSI-001の遺物出土状況は覆土中に一括廃棄された状況を示しており、埋没中に集落内の人が大量に廃棄したものと考えられる。一方でSI-002の遺物出土状況は散漫で、埋没中にも廃棄があり行われなかつたと考えられ、集落内での活動が落ち込んだことを示していると考えられる。

次にSI-002とSK-010について少し触れておく。SI-002は柄鏡形住居跡で、墨古沢南I遺跡では初めての検出となる重要な資料である。周辺では、飯積原山遺跡で2軒検出されているのみであり、同時期の住居跡の多くは円形である。まずSI-002の時期については、加曽利E式終末期（中期末葉から後期初頭）とした。これは構築時期を示す連結部の埋甕が、文様をもたないため細かな時期決定が難しいためである。覆土中からは、称名寺式土器（第8図20～23）と称名寺式に並行すると考えられる加曽利E式（第8図7・10など）が出土しており、SI-002が埋没していく時期は後後に下っている可能性が高い。そしてSI-002が埋没完了した後にSK-010が構築される。SK-010の出土遺物はいずれも加曽利E式終末期の土器で、土器型式ではSI-002と大きな差は認められないが、称名寺式をはじめ後期初頭の土器群を、覆土中に含む遺構の埋没が完了した後に構築されるという点からも、土坑の時期は確実に後後に下っていると考えら

れる。SK-010は、その範囲がSI-002内で収まること、底面もSI-002の床面とほぼ同じ高さである点から、住居跡を掘り返した行為の結果と考えられる。こういった中期末葉から後期初頭の住居跡をはじめとした遺構を掘り返す行為は、国立市緑川東遺跡（黒尾2014、2015）で報告されており、当該期に各地で行われた可能性も考えられる。

今回の調査において、墨古沢南I遺跡の集落の南側の一部を調査し、この部分での活動痕跡が明らかとなつた。狭い範囲であったため、十分に遺構を調査できなかつた面もあつたが、同一台地上に展開する集落遺跡である墨木戸遺跡、墨新山遺跡、近接して所在する墨古沢遺跡、飯積原山遺跡などの集落間の関係性や、柄鏡形住居跡をはじめ、称名寺式に並行する加曾利E式、凹みが施された後に被熱した石棒のあり方など当該期の遺構、遺物についての様々な問題を解明していく上で、ささやかではあるが、資料の蓄積がなされたと考える。

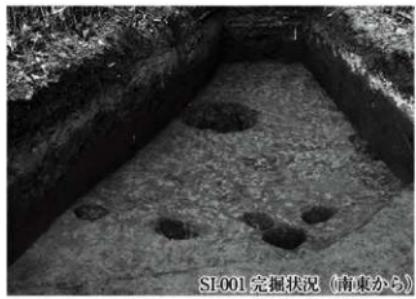
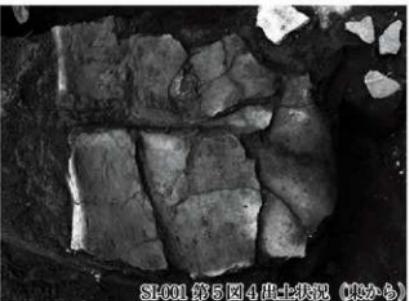
参考文献

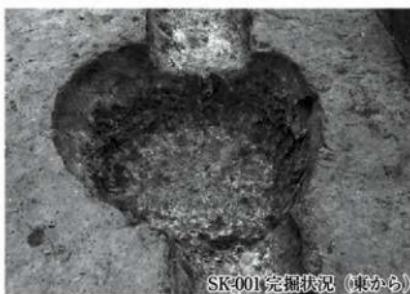
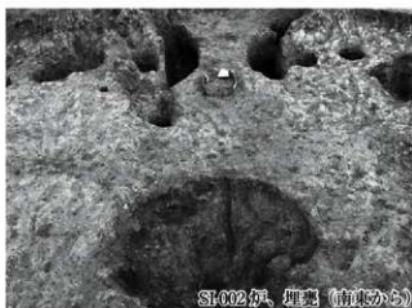
- 山内清男 1937「加曾利E式」「日本先史土器図譜」Ⅸ輯 先史考古学会
(財)千葉県文化財センター 1981「第4章 酒々井町墨古沢遺跡」「バイブルайн—新東京国際空港航空燃料バイブルайн事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書一」
加川泰良 1987「酒々井町古沢南遺跡出土の縄文時代早期条痕文系土器」「竹箋」第3号 北総たけべらの会
酒々井町・(財)印旛都市文化財センター 1987「千葉県印旛郡酒々井町古沢南II遺跡発掘調査報告書」(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書第8集
石井寛 1999「称名寺式土器の分類と変遷」「調査研究収録」第9冊 横浜市ふるさと歴史財团
加納実 1994「加曾利E III・IV式土器の系統分析」「貝塚博物館紀要」第21号 千葉市立加曾利貝塚博物館
黒尾和久・小林謙一・中山真治 1995「多摩丘陵・武藏野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」「シンポジウム縄文中期集落研究の新地平 発表要旨・資料」縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会
(財)印旛都市文化財センター 1995「千葉県印旛郡酒々井町墨木戸一(仮) すかいらーく酒々井工場建設予定地内埋蔵文化財調査一」(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書第100集
(財)印旛都市文化財センター 1995「千葉県八街市一之郷II遺跡 一之郷III遺跡一八街市文造・板台地区宅地造成地内埋蔵文化財調査一」(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書第102集
(財)印旛都市文化財センター 1997「千葉県印旛郡酒々井町墨新山遺跡一ホソヤミート調理食品工場造成地内埋蔵文化財調査報告書一」(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書第130集
(財)印旛都市文化財センター 1999「千葉県印旛郡酒々井町墨木戸遺跡(第2次) すかいらーく酒々井工場建設予定地内埋蔵文化財調査一」(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書第151集
(財)千葉県文化財センター 2005「東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書2—酒々井町墨古沢南I遺跡—縄文時代編」(財)千葉県文化財センター調査報告第507集
(財)千葉県教育振興財團 2007「東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書4—酒々井町墨古沢遺跡 旧石器・縄文時代編」(財)千葉県教育振興財團調査報告第570集
(財)千葉県教育振興財團文化財センター 2013「地方特定道路整備委託埋蔵文化財調査報告書—酒々井町墨広畠遺跡・墨古沢南II遺跡一」(財)千葉県教育振興財團調査報告第707集
黒尾和久・渋江芳浩 2014「3、遺構における遺物の出土状況」「緑川東遺跡—第27地点」株式会社ダイサン
(公財)千葉県教育振興財團 2014「酒々井町飯積原山遺跡2—酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書3(縄文時代編)」(公財)千葉県教育振興財團調査報告第731集
(公財)千葉県教育振興財團 2015「酒々井町飯積原山遺跡2・飯積原山遺跡3・柳沢牧墨木戸境野馬土手」(公財)千葉県教育振興財團調査報告第738集
黒尾和久 2015「3、遺物の出土分布・出土状況」「緑川東遺跡—第28地点」株式会社ダイサン
加納実 2016「関東東部の中期最終末から後期初頭の土器群」「称名寺貝塚と称名寺式土器」横浜市歴史博物館

写 真 図 版



図版2

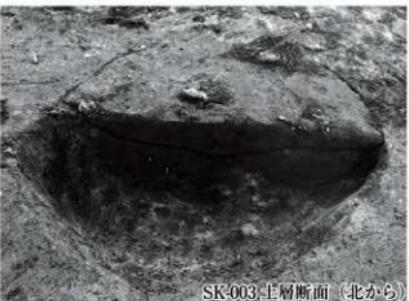




図版 4



SK-002 完掘状況 (南東から)



SK-003 上層断面 (北から)



SK-004 上層断面 (南から)



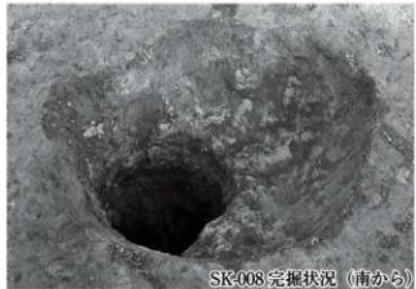
SK-005 断面 (北東から)



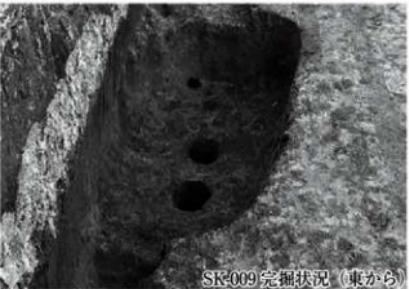
SK-006 完掘状況 (東から)



SK-007 完掘状況 (東から)

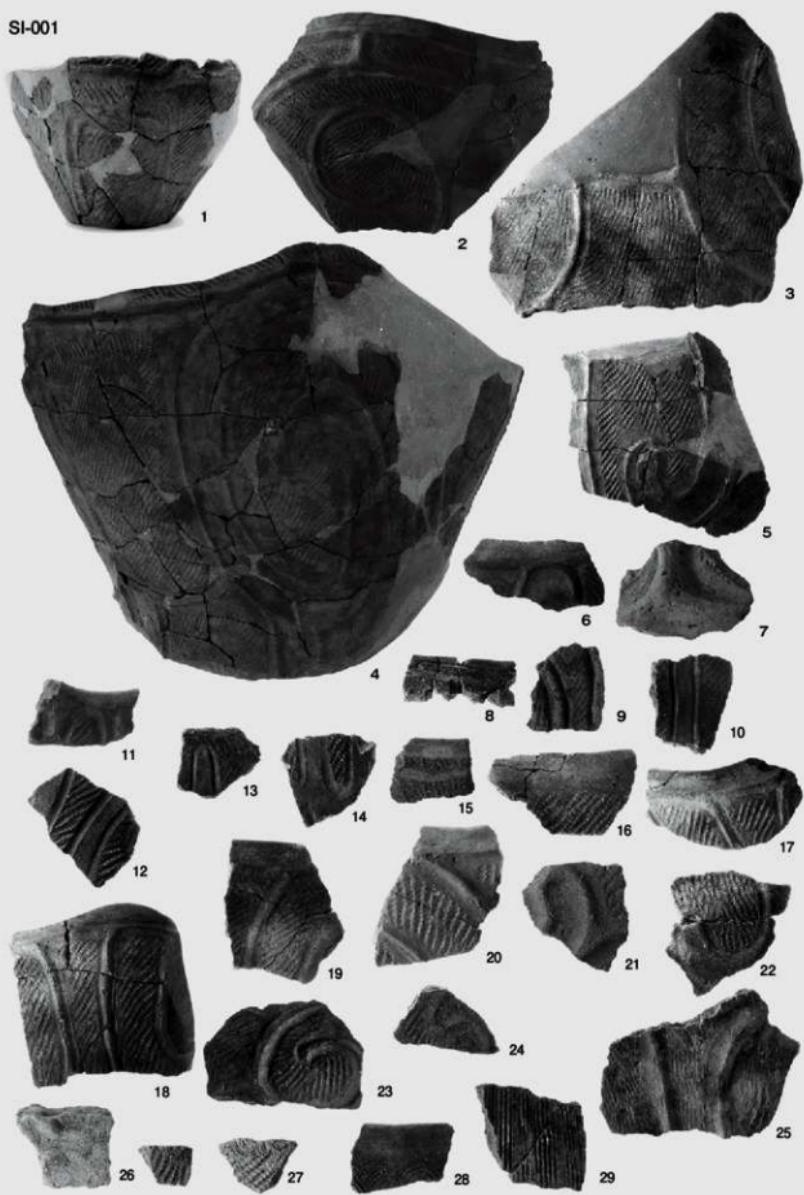


SK-008 完掘状況 (南から)



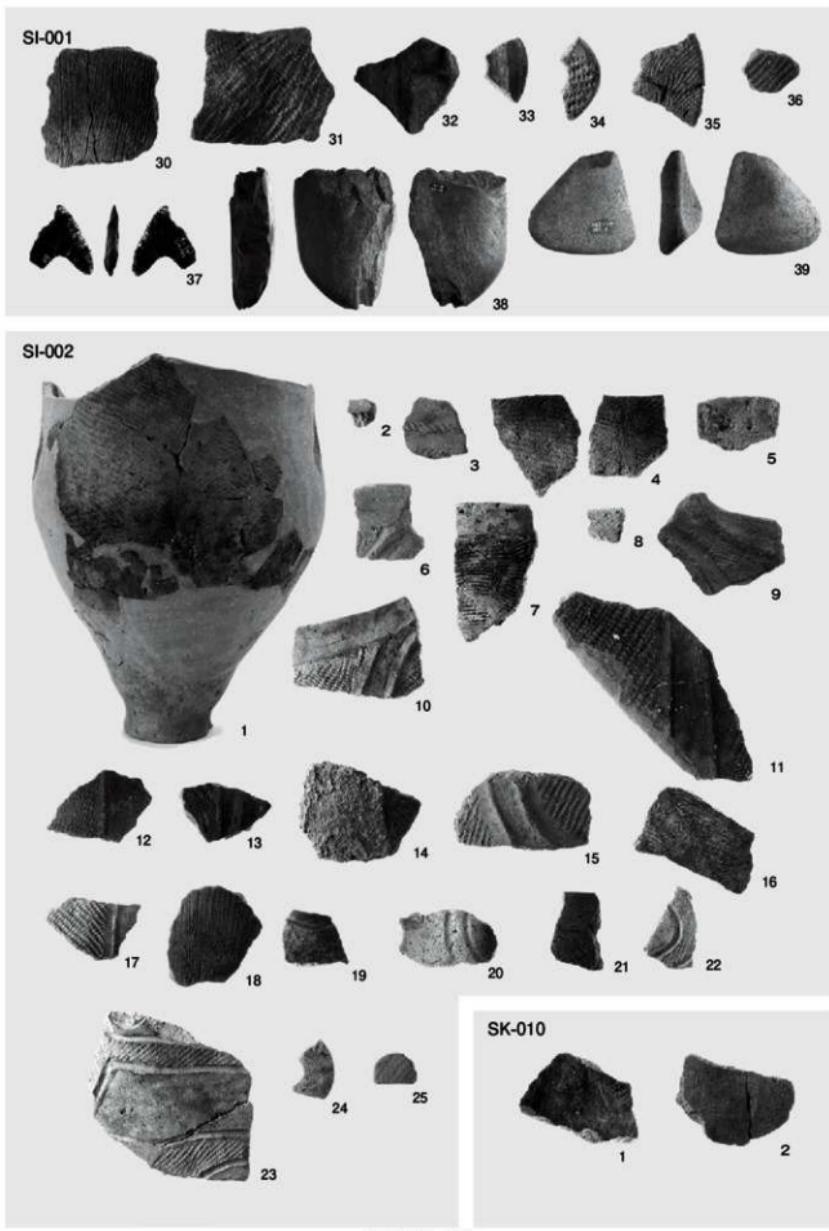
SK-009 完掘状況 (東から)

SI-001

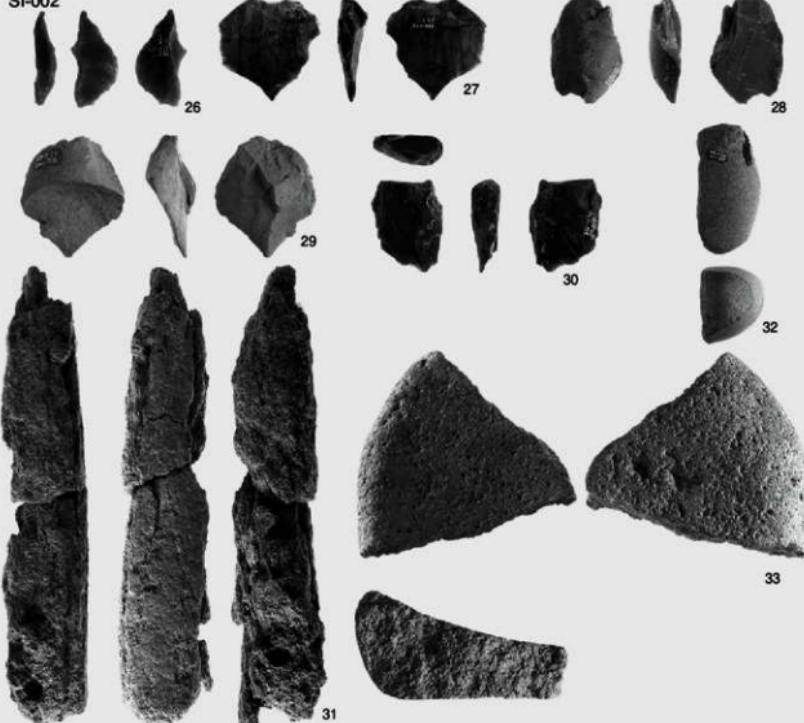


出土遺物（1）

図版 6



SI-002



SK-001

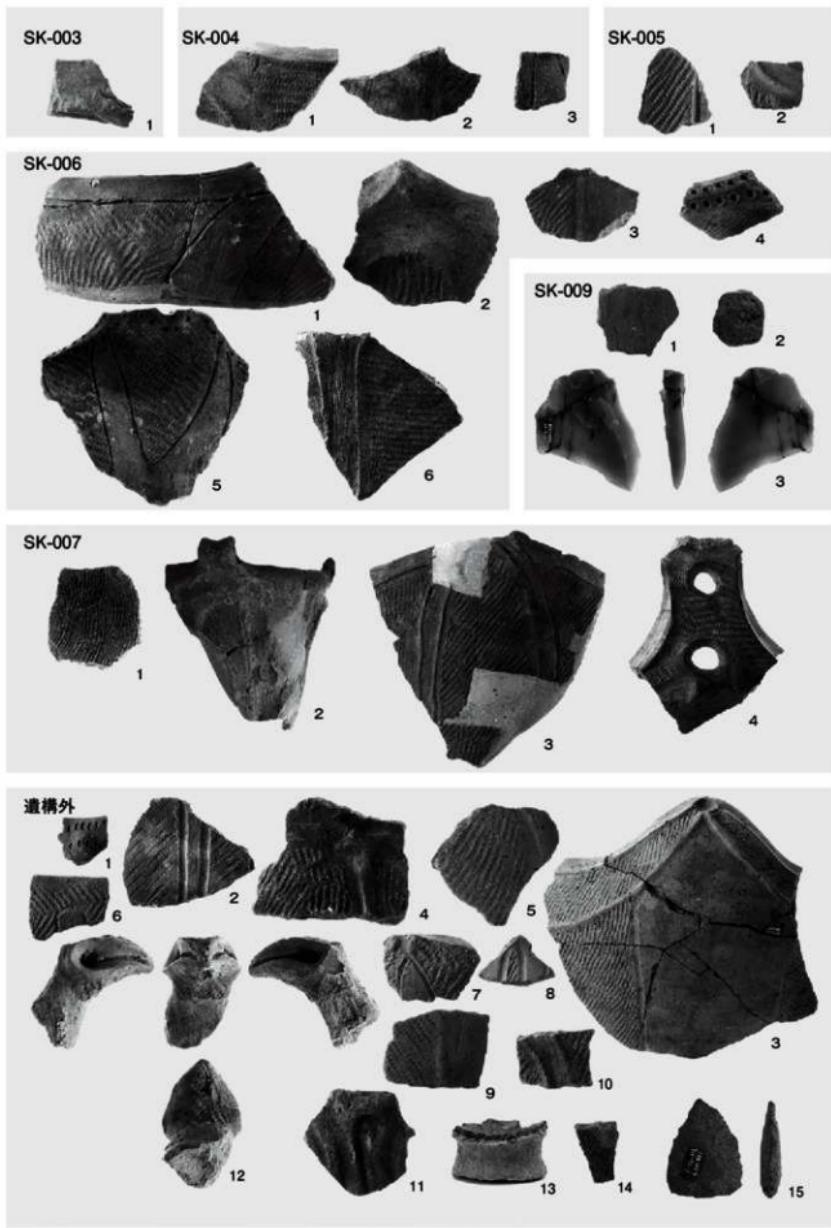


SK-002



出土遺物（3）

図版 8



出土遺物 (4)

報告書抄録

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第23集

酒々井町墨古沢南I遺跡（2）

—主要地方道富里酒々井線（印旛郡酒々井町墨）道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成30年3月23日発行

編集・発行 千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町1-1
印 刷 三陽メディア株式会社
千葉市中央区浜野町1397
